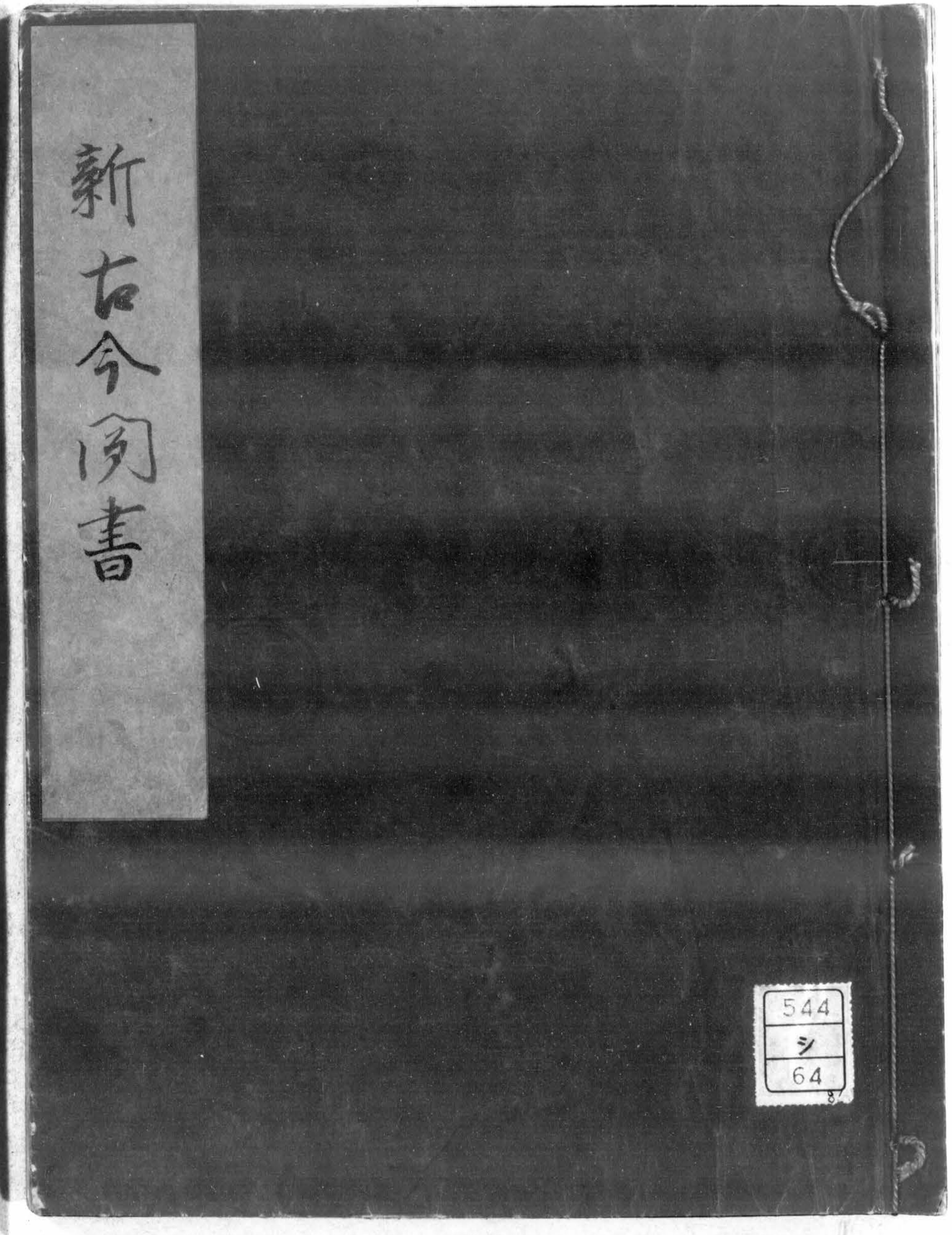
新古今聞書
544
シ
64

新古今集聞書上巻

春哥上

みよしのハ山もかすみて白雪のふりにし里に春ハきにけり

此哥ハ上二句の巻頭に置れしハ一首の内に題号ノ心ヲ含メリ 五文字ヨリ ふりにし里と云ニ古今ノ二字ヲ云 春ハ来にけりと云ニ新ノ字ノ心アリ 是外おの聞中ぞ

同

かきくらし猶ふるさとの雪の内に跡こそみえね春ハきにけり

跡こそ見えねトハ春の跡を云 又人の跡の心あり 雪中ニ人の跡こそ見えね子カリ古キニモ春ハ来ニケリトや

詞ハ人もなき荒たる里なれとも

ふるさとへもふるさとなれとも行来を初めの春と見えたる

ふるさとハ来の道りもなしかり春ニかよふ

とあはれなることも也

544
シ
64

大阪市立大学図書

大阪市立大学図書館
昭 24.7.13
184063

時ハいまは春になりぬとみ雪ふる遠き山辺に霞たなひく

此哥ノ心ハ今ハ春ニ成又ト讀キリテ遠キ山辺ニ霞たなひく
と云句ニカナヘテ見ヘシ

かすかのゝ下もえわたる草のうへにつれなくみゆる春のあは雪

淡雪とハあはく消やスキ雪ニイヘリ然ルニツレナク
見ユルト云事ハ下萌ノ草ノ葉ノ上ナルハ淡雪モツレナク
トヨメリ見ユルトイヘハ草ハつれなしといへるにハあらさるへし
又消つれなしと云ニ二ノ心あり一ニハ人ノツヨキ事一ニハ執心ナ
キ事ナリ此つれなきも若草ノ上ニ淡雪ノ消カヽリ
タルハ類ナク面白ク見ユル也

あすからハ若菜つまんとしめし野に昨日もけふも雪ハふりつゝ

赤人ノ本領ニ見ユル[illegible]あすからとハ[illegible]つまんと云也
此句も[illegible]と云なそ[illegible]へし[illegible]
と定たるまハあしくさるへし

谷川のうちいつる波も声たてゝ鶯さそへ春のやまかせ

古今の哥二首ヲ引合ニシテよめる也　谷川ハとくる
氷ひまことに[illegible]　花のかを風の
のたよりにたくへてそ[illegible]　谷川の[illegible]も
花や[illegible]鶯をたそ[illegible]ハ鶯さそへと春の山
風よ云けたるさまや

春きては花とも見よとかたをかの松のうは葉に淡雪そふる

春きてハ花ともみよとゝハ冬ハ雪を賞し春ハ花ヲ
賞スル時ナレハ春ハ花ヲ見ヨト松ノ雪ヲ賞スルなり
又此冬ハ雪ノ時ニ逢時や春ハ花を賞スル物ナレハ春は
花トモ見ヨトせ花の時にあはせナレハ云[illegible]より
て花とも見よとよめりといへり

巻向の檜原もいまた雲ゐねは小松か原にあは雪そふる

巻向の檜原ハ大和の名所也此哥ニ春の詞なし

まつこえけるねと云も我の心にまかるや餘寒の神也

今さらに雪ふらめやもかけろふのもゆる春日と成にしものを

雪ふらめやもハ雪やハふるへきと云心なる詞也けり
かけろふハ両説あり光人あり又糸遊とも云これハ虫に
ちかくとしてもゆるを云也陽炯（焔）ト云也此事ハもゆると
あれハ陽焔ノ事也されハもゆる春日と成にし物也と云
よ雪ふるらしと云ハ雪のふるをとある之

夕月夜しほみちくらし難波江の芦の若葉をこゆる白浪

此白波のこゆると云ハとそてあるへき也よハ眺望又難波江を
らし波のうつくしくこゆるかとようの又説に月の
つりたるを白浪のこゆるやうにみたてたる事とも
いへり

あめ流したるみのゝ雪けよりも清瀧川の水のおとなき

清瀧ハ愛宕山ノ麓之皮なるねの雪消たる也

よ此川よ白波の流るらんとよみけりよかりけりとある
まてみるへし此事を定家ハ清と云字をよまれし
たる事と歌をよまれしより順徳院御事に
ちく此川其為ハ其ことによりきくいへれ共是白雪
とあそへつされたるを此事にハ立あまさわつつるとゆされたると
梅が枝になきてうつろふ鶯の羽しろたへにあわ雪ぞふる

鶯のきなるとハ鶯に云鳴きまそてかなし梅がさきなと云
やうに本をいて梅のさかんとまるる枝に雪の降る
ま云梅をいたむるやう之鶯ハ雪を賞して花ともいハ
しとや雪を賞まれたる其の名をたてつる之理之其
のうちまさる雪なれハうつくしく云之梅に対して鶯を
るゝ之御むつうしきこと

天原ふりみれの其風雲もまたふく明なのくもる

天原ハ空を云之天原高天とかくもあり高天の原の

詞そよけしのかりたるも光や春に月なくしテ其の気に
成たるとなりニ句ニテキリテ見る事ニ
見ゆる時は出すとなすむい此七瀬川夕ハ秋となまよむかしくん
名七瀬は山崎乃西や面白事之夕ハ秋トハ九分ニテ夕ノ
気氣あはれニモ面白事ニモ云ナラハミ夕レトモ此名七瀬ノ山
平のさむ気氣秋ヨリもまされて面白くあはれむ事
きこへんしてあはれまされたる流事之
大宮ハ梅の匂ひよるよみて曇もなきぬ其のよのつき
てかりもせぬ句りもえてぬ其のよし　有りもなき
てぬと云詞一をえて平気なるをきこしさせたる事之
識の意なるハ句りをいて何くなれたる梅の匂ひよみす
こゝる月なれハ句りをいてさとなる梅の匂ひよ
月のなきりくとなさみゆる気氣ハ平気の如く修
如なしといふまや

あふ迄かり紅なる梅れ花けさきたるなしよ雪ハ降りと
紅梅と雪のかはりしたるを比之され紅なれハ白
妙の雪よまつハさをあふ迄なるとや　有色易分残雪底
七情難弁夕陽中
看するよ見よ云ひれしうりの気れ晴るつきさまよ其面白かる
居令の春秋従来の辛労をあはれまる事之
行くと其のなかのさきしきハ其の晩まつるよ新のむかふ
雨中其面と云ふ事とあり其のなかの光とハ其の森
堂物をなかむるんをとこへてある事之新ニ出るの
ある稗まて雨中ノんをけうりたる事之
名の雨よけやをかりこゝる其面へ山のみをわとなて深くん
名れ雨よあやをかりみたるとハ雨すれハみかうしこきて
絞あれハ綫をかりこゝるとや名よハ絞をなかし山よハ
名をも深出せは其面ノ不作を盛めある事之柳　無気果

力催之入勤池有波文収之閑

風のはちも草ハ物しなるむ春日み八と只ハ春の日のよ海老伝らん

春日野ハ尓かハなつやさきて花の草花と云ふより出たり支

ハ光まて焼ハやろて萌出る也此方日と云とり萌えい

つりやまたと只春の日にほ見へきと之事方ノかゝ六

十ヤ十ツト云ヲうけてやれとも草ハ中しんとよめり

春日ト云字春ノ日ト半事ゆ也ハ只春日に任せまとや

なんと云詞二ありかかハ物ノ沿定し存るヲ云十之

霞よきそ花よふらせる手間より燕し也なき出光有

花も霞きそくろせる手以呂に又月も与風見たる風系

云浩尤郎なり之し而日事定参存るん之月ヲ葛

散りやうよ云説もろしとや

花乏さる花れもき草ふそろて名れく家の春の曙

吉野ーと云名所三ヶ所名ど丹後なれ沢氏よし此

武蔵ノ一説大和也此方ハ丹後ノ下云説ありて花ハ十キ

事なれハ大和ノ吉野ヲ見もの花ヲ見ト云但前ハ大和

ノ名所之ノ事也

桜さく遠山鳥のしだり尾のながながし日もあかぬ色かな

人丸の歌ながくしくと独も猿人ヲ申事方ト云へるは

されたる流新衣之趣して賀と云事ハ四十歳より上

又十年ニ満スヘキナリ賀スル事之親ノ賀ヲ子孫なと

として師匠ノ賀ヲ弟子なとの又スル事也此尺ハ均乃

賀ハ天子より給ハせ給ふ之方なの法師絶ノ為之仁和法

門僧正遍昭ニ七十ノ賀ヲ給りし例之後とも定家の花

山のほとり老ける宮内の色よかふる名の光をとつる後

成の賀ハ建仁二年八月己二二法方の心ハ桜の花を大均

よそにして皮齢ノ万歳を送るとも均しとあるて

たまれるり此流数見の法なくさき教均の名

蓋之源氏に匂宮ノ浮舟君をも春の日くれとも
あらねと云詞なと思食出られけるにや賀の時ハ扇
風と新調ある事也
時もしれらのむのかれ別さく花ちる比花みよしの々里
はみより跪ハ武蔵国之花なとよみくるとハみよし野大和
の名所なと云也わりて出るはよれ田面の庵まて
時しも別れ花ちる比帰るとてよみたる哥也
老の身や我外すもまし桜花さきてハちりぬ只花世の中
流世の老をると云事を夢幻にたとへたる事なれとも只桜
花はまたくんとありて世の中のたのみをたとへさる
の外はないのしと
からハ来とうへてあるふをふそふらむもと花ちるせに
曲水宴をとかりくるしに武陵桃源に巴水とて
水流あるへそこれて三月三日曲水宴とて盃を浮て

詩ノ作テ柳ヲ以テ水成巴字初三日トいへるも
此心之花ちるハ柳なとの汲りもとゝまる哉
人我世ハ女の事にいへり
哀なりあはれにも是ハ花なれは花の名ハ春の山風
此歳花を恨みに春風は吹ノ花ニちらす事も
人のうきよあるを風はちらせは恨んと風にそれ
あれ誰ノ恨みにも吹を いへりんうき物にんを
我する此哥のあはれや

哀ア

ちりあへて花の咲るさまのよそにとや花哀哀
なれのさとも我云我時なるもころとや花それ
の咲ハ見と年ふとして花の時ハん花になりて
桃ならある者に若ニリ見ヘテ花の才キ時ハ之事アスキ上
云るやあはれを花はひきむもこれわねの涼の露の暁

伊勢ニテハ斎宮賀茂ニテハ斎院ト申セしそれをもい
つきの宮とよむ也昔ハ斎宮へ内親王一人つかはらせ
らたまひし也賀茂祭の時御輿を作り葵ニテかざりて
罷出るなりけり行の野人の畠中ニシメヤト
あれなしけるとや

いはせんこね宜あまりこの郭公まろしと打見ハ村雨みそら
たちめつこね宜はやくしよ職あれハまこしとふつそ
待まされる事にてはよあまことある哉也人の
事を郭公ニ云人まろしとふつそ待よまさまるを
云をまろしと云ふ村雨の空といひ出たる面白
白しんとくれて待こね宜あまりになれハそこ迄
てまろしとふハ又村雨のしてかしきれのなく
面白き事しきなるをいはせんとよめる事ニテ見れ
やり斎おなるニテりや

きつれしもとをまよせん郭公山田の原の杉のむらたち
山田の原ハ伊勢也山田ともをとせまさんトハ取分にきんとく
山田の原の杉のむらたち時鳥の鳴声なれハ咲いともしも
をせまさんとおもひてあの心もとなくもなき
と云ん也

玉かしハ茂りにけらし五月雨に葉守の神のしめはふるまで
柏木ニ葉守の神のましけるをしらでそおりした
なさるな葉守の神とハ其ゆへ領スル神也
玉かしはと云ハ人のこゝろにても有て繁茂する五月雨にそゝく
茂りくハ意にし詞也玉柏の人の是にとくとも有
此歌ハ人の氏やう不思議之意有人のかくしるる事ハ
此事よりけしも子細ありし世間往復の今文
ごとくなる五月雨の時にとよめる也古今の人
の説つよしそこさへ頼めるわかとよめるを五月雨の

ほたるハ撰言好ニ

五月雨雲のたえまもなかりつゝ宮こより吾妻ぢに月なき旅
月ハ東より向て行ぬる之それを五月雨のほたるハ八月
いつる晴ありもなかりけれハ夜の月ならず濁すて晴りやする
と宮こより吾妻に行くらんと

然れば又花橘によりにほひにける我もむかしの人となりまし
花橘に対して古人ヲ思ヒ我身も古人ニコソなりなん
さいふとも詠の残りハ思出トカノ徳モナキ事ヲ
早下メヨメル之

鵜かひ舟あかれとそ思ふ奴の八十うち川の夕やみ
言の葉も面白なる事なく噂し夕ル程思ひくニ夕闇ニ
見ルト云羽不實之篝火ハ水ニテ見エタル故ニ之篝火ヲ
ナガメ久メ人ニモタセタル概説書ノ趣ナルヘシ

久里の中なる川の鵜かひ舟いつに契りてやみをまつらん

久里の中におひたる里なれは光をのみそたのむへき
なる桂ノ里ニテ伊勢ノよめる言之所ハ桂のさとなれハ
月ヲコソ本トスヘキニ所ト契テノ闇ヲ待ツト構ヘ
ヲ見テヨメル言之

いさり火のむかしのひかりほのみえて蘆屋の里にとふ蛍哉
業平の蘆屋の里にすみける時あの里の川
への蛍をと詠ミける也思ヒテ昔ノ光ト詠ミ給ヘリ蘆
屋の昔も今ノ如クにおもハれは其光ヲ詠ミ人とも
なりすとそ

かきくらし晴れぬ夜なからさきたえまや月に
五文字より前尾さへやうに面白くて言好の言なる也
夜をとへさびしハおもかけに月をかこちたれハ晴し
きとや

とのつらき晴しくもあるきは月もゆかしれの篝の名残

あるゝハ夜るや夏の日もとつけゝるハ懐朱よひかと
云物あるなるまるさつけゝり夏のなごし納涼とも云
物なれハにさし物なれとも首夏の名残日影に暑り
きとあり其の心を云詞よくあひあへれ也

奇特の事

秋なりつる夜山かけよそのひて吹くる物を秋の初風
君ひつゝハ秋風の事と夏なるに吹と云是秋風ハ
た山陰よ吹来ん物りよ知らすわくる物ととりと云事

夏衣なる之すゞしくなりわねなかわ衣やかけぬらん下の衣ひの
るへハ一ツや夏ハ下秋ハこなる事へくるとも下のあひの也
と云やる之涼しくなるハ秋のくるやと之夏と秋と
下の衣の通ちハそゝ涼しき風や吹らんと云事
とよりわ

秋ア

吹風の色こそみえね高砂の尾上の松よ秋ハきにけり
松よ吹風の音ハ花紅葉よ吹とくその色ハ見えね
とも秋のくるとハ知らすよ知られけると之

涼しき露のよすかも其ハまそ置をとめすとも秋ハきにけり
今こそ知るゝこゝしきかと人よまさん置をとハ秋を知へ
わかかれ此句の一句ゞ見しりよすかハ後之涼しきなる
露を後よかれと秋のくるとよめり

あれ又いまよしのさん秋の露野ならの風よ秋ハきにけり
第二の句よそきかわて之後の事之秋ハ露野原ニハ風吹時
ふきなれハ下と堪忍とよりしとよめる事之

夏好の枕へぞよ色ぬらわ露をころぬる秋のいろかせ
夏好の夏て堪忍心之風のなつひよあつわしちる
すゞしく氣枕のとゞハ色そいつくへ下そ我涙ハ染る
ぬるとよめり家涙をこそちらさまえやとよめん

こしふつきは桂し山高よたひたえうて文月ぬらむと秋へきなり
みしふハあの端之こゑひなとゆふも同事之秋ハ文ひ
たなとをつけて文月のぬるしとよむ也又秋のそ
銀漢の神之私云七夕ハ引板トモ云
荻の葉も音ありて々秋風の音信そむるつまとなれん
妻とハはそもいつのあひあふ事を云へそれハ風と荻と
の事や

七夕の衣のつまをかさねんしそ吹なるしそ秋のころのせ
我せこか衣のつまを吹かへしうらめつらしき秋の初
かと七夕ハかれの逢事をかれんかはると云事を帰る
まそれを吹かへしてたと秋風よしひかけつる
ゆふま庵のしのゝみかけてそわはてなのれぬ秋荻の花
荻をと云庵の妻と云たうつせわ萩にやむすはれけと
たれるよみわ庵のたゝみとひつるまや古とそり

秋荻をわたるみよせて吹庵のあまハみしをそ音の
さやあき

おきそこんとなつしかとよられはなわ露よかけなる槿の花
花てこんとハ露と我の事とかりかけて云之只槿の様なり
あるかなるをとらん為へ枯れハ花なりしとらわ花て
こんと云事をつけく云之それハ花いはしゝるやうよ咲
こん得ハ只槿の花のあかき理これをかけてこゝる之

花落るゝ露かしなよ出てなかめしとなれ秋のさゝうると
とよわハうへてこまこし花落なよ出る秋ハまひしわ
たわ面白りうつむれハうれしくまへとるやますもゝ事ハ
なかの見しとなトし花よ文露深く穂よ出給事ハ感情
きやよわるくてなかめてゆきなりそ之文云字ハ第
ころよかりてありわ

定円
みやこやいつわ秋乃なるらんみえさりし雲のゆふくれの空

夕暮のこゝろしきる色ハいつとなく秋の夕に成ぬるを
とおもふに思をそふる也

雅経
たえてやはおもふありともいかゝせんむくらの宿の秋の夕暮

おもふありともむくらの宿に住をおもハんにいかゝせきねとハ
秋をおもふ心をそふるものゝあはれをそへし庫の宿の秋の
夕暮ハたえてやハおもはまんと云一説之されたるを謂ハ
まて思ひはかりしけさなる白あるにはいかゝつるに
やかて心ハ玉楼金殿をさへいたすへしと云を以
くるなくくてやハと懐思してやハおもはまん
そとく此庫の宿まてなつかしなる事をも秋
の夕暮にハ堪てやハあらんときこえ侍り

式子
それなからむかしにもあらぬ秋風にいとゝなかめをしつのをたまき

秋風ハ昔にそれなから戻ハ昔のやうにもあらぬことく
緒のこゝろまたハくり返しをなかむれハ昔を今になき
いやのゝ心緒のたえこしたくくりかへしの昔を思はうちけり

和泉式部
秋くれはときはの山の松風もうつるはかりに身にそしみける

常盤の山もあはれとも身にしむるハかハりと云事をしるる心
まとかなり
色のかはれ墨の月影さひしさも絶くしまこの野への草をきせ
眼となりて鳴虫もかはれにやなるこ
さうん徳あしとハ懐思してしつるを云也

俊成卿女
大あらきのもりのこのまをもりかねて人たのめなる秋の夜の月

大荒木森 社 山城 淀の辺にある名所也人のたのむと云ん
をあはれとなすと云なや大荒木と云かに似たを本源
きこゆ木の間より月のもるとおもハん松風と
云ともおとなりにむ人おほれあらきとハとよむ口傳之
又未年よむ時ハあらきとよむ口傳之古今よ
るあてあもひかおほ枝ハ人のかなしむるなりとそ見えれ

うとまる同し今のかた言に依てつゐる事也」し

慈円
いつまてか涙くもらて月はみし秋まちえても秋そ恋しき
述懐ノ心之いつまてといひしはそのや秋ハ待えてもとハ老の秋ハ秋ノ恋しきとハ昔の秋ノむかしみし
月そ涙にくもりて見しとハ老の涙に月をもやかし
かれハ昔の秋ハ恋しきとよめるへし

式子
なかめわひぬ秋よりほかの宿もかな野にも山にも月やすむらん
思ひしさるに昔を立出てやとのかれハいつくも同し秋の
夕くれなりと絶ぬハなりけりとおもひけるこゝろや
三千界の内いつくも秋ならん悲しき事ハのかれん
方なきよし又なりとひぬとの理も山をも
月のなき所ハあるましきと之定家ノ言ニ秋よれ
なけれ共そしも出る人し此里のその夕と書て
なよの歎なりへし

堀河院
弓張やいるさ山の雲間より光さしそふかたわれの月
弓張や(ハ)八月中の比の名之弓張月ハ上弦下弦の事也
云人八月九月ノ比ヲ上張(弦)下云夫二三日比ヲ下弦トいふ
いる円山ハ的ニヨミナセリ

摂政
こよひたれすゝ吹風を身にしめて吉野のたけの月見るらん
すゝ吹とハちいさき竹の事之山伏のすゝかけ十よ
説ハ物そゝとい吉野ノ嶽ノ月ヲ眺る我身ハ身にしみて
それとよめるといへり説ハ我のこゝろ月をとると自
讃の歌なりそれハ吉野のたけの月をみるやうてよ
めるとこそ説つきてやいはんよて修行者の面影や

俊成女
ことわりの秋にはあへぬ涙かな月のかつらもかはるひかりに
久堅の月の桂も秋ハ紅葉すれはやてりまさるらん
上界の月宮殿サヘ秋ハかはり給ふハまして下界のはかなき
心かはる理もありや

寂蓮
時しもあれふるさと人ハ音もせてミ山の月に秋風そふく
時しもあれとハ時こそあれと云詞也　昔のことゝ恨ミし人
も物縁なくて秋風たちし暮つかたと云事之吟味分等
詳にや

家隆
月ハなをもらぬ木の間も住吉の松をつくして秋風そふく
住吉の松ハいつれも深くして月のもる事もなきを見
さらさらやと秋風の松をはらひし吹くしめり

秀能
足引の山路のこけの露の上に寝覚夜ふかき月を見るかな
寝覚夜深きと云は物待宵也　寝覚ハ暁方近キ比なれは
也　殊ニ若也ノ露ノ上ニ寝覚る夜ハまこと清かれとも深
山ならなれハ夜深きと云に相よおもひやするなれ

宮内卿
心あるをしまのあまの袂かな月やとれとハぬれぬものから
思ふことハなかるへしや海人ハ心のすきすきしからねとも袂の
ぬれしたる月をやとさんことのやうにおもはれ侍るなり

長明
松しまやしほくむあまの秋の袖月ハ物思ふならひのミかハ
物思ふ袖にハかゝる月ハやとれともしほくむあまの袖も
月ハやとれる物之とよめり

左京大夫顕輔
秋風にたなひく雲のたえまよりもれ出る月の影のさやけさ
雲間よりもれ出る月ハきらゝかと天明かにきゆるなり
天晴ニハ月の光ハなき也　大道廃テ仁義おこるの理也
よひの間にさても寝ぬへき月ならは山の端近き物ハおもハし
上旬ハ宵ノ間ニ雲ナトかゝりて面白からぬ月ならは
寝ぬへきをと云んやもしさうも晴て月のなかめて山
端近き月ニ成ニアなりそ物ハおもハしとや
月たにもなくさめかたき秋の夜の心もしらぬ松の風かな
月たにもハ月にたにも也　なくさめかたきハ感情ノ深キニ
観しねる人なり　更科ノ姨捨やさ秋の夜ノ

何も紅葉月の面白サニ長ミトモ云ハヌト云ふしとしといへと
またば夢のわすれかゝる秋のよのあはれハいふなかせ
よや
月を待まつらん村雨の晴行雲のきえの悲しき人
村雨ハなにぞ晴ぬれば又しらずなる物なれなれ
なれゆる物はうたまのそのかはる里人の月をなほとも
そらやるらん面白云々
秋の色ハまつほのように成りけりと見えしく行衛の月み
暮秋の夕之歎の苦しきと涙れかゝるを秋の色の
定としくなかるとしつゝなかれ身に秋もなかりとハ歎の苦
なきと枯ずして月にさゆるあさましく月のなかりきと也秋の
多くのとくなるれ共月又秋もなかくしくなる事を云へる歌之
大かたの秋のねざめの露けくハ又いかにかの袖すまりあかり明の月
大かたとしたる二様あり一つハ大概なりとし云ふなるべき

あはれ人ハツ九ツト云ふや又すがしとなつてしと云ふあわれ云云ハ
すかしなくてと云ふやすかしあきて秋のねざめの露けき
きあれなりらん我ことく又たかの袖すまりあかり明の月ハやる
らんとや
あらひまさるゝとハ露のあけくれの色となる月の袖の世な
やどるハやどるかと云ふ之あらひわるゝる露のあけ
きまゝ月のやどるもあやしくいつともきんまでせきさへの袖すまや
どる月かと月の光を感じ見え之袖のせまきハ早すんと
さてそハあはをあひつゝるのしはり又かく云へどもありんや
下紅葉のつらゝる山の夕あれねぬれても色そわ床のなつかしん
ぬれてやと云所ニ感情とも流るゝ何なれおもハ下紅葉の
流るゝ時の風雨、言語を縁とするわが床の鳴をむ
つらまゝ床ノまうけと感しつゝある人
あはれ袖まわ露やよるらん秋風あけたるくぬき

衣ハ能叶ふくわ露と云ねハ物さゞ手袖をわ留て
一首の趣ふかくも七中句面白衣之秋風吹けちらし
るし趣るれとし又やそふかく有ふ多しぬ趣と云下
句より上句へみるへし袖よ露の縁ぬんとうつり

衣うつ砧山乃いさ見ぬ見らぬ夢ちよむ里よ秋
砧山ハ葉之衣うつね山とよひけるや見ちくいなけく
や見らぬ夢ちよふ砧ぬ事なのるへし

まとろまてなうらぬよそのまさひる露のさ衣月よろ鼓
此衣ハ人のうつを叶ふる之終夜衣擣ゆへよまろまて
月をミて衣擣る盛しうるんそ面白くや

夜々よ衣うつとハ行鴈や猿の声すもなきそれくうん
此衣ハ蘇武の古事すよまま記とされよも不及擣衣よ
鴈をよむ事古詠ハ来りすへ多事星前擣旅鴈菊
楼月下擣寒衣なと詩よも作りり鴈さ告ルト云す

八伊勢物語に秋風吹へとうわよ告こせとあり此古
々ハ猿人の古々なんへこ旅の兄ハ鴈の猿ニハ有ヘカラス
人ニ告ルトヨメリ

独ねる山鳥のおのへわ庵よ霜をきし衣よ床の山風
足引の山鳥の庵のへわおのなうつくしに成独も
砧ん山鳥ハ雌雄枕を隔て独ねる趣なれ共ちの袖ね
よまさへてなうぬ之霜をときょよは月と霜ととへ
ま霜衣必ちきさ趣なのるへし

きりくす鳴や霜夜のさ莚よ衣かたしき一人かもねん
狭莚よ衣うしきに夜の俤をまろんし
足引の山鳥の庵のへわおのしし此二首を本
衣同して多わ狭でもうつるへき霜夜を独
もねんとよめり

秋かぜ吹きはつゝの鳴の音のまよるき伊く月成おくる嗚風

景気の分之処たんなすとこゑれ里志やくるこ御く月
をみれなおもしきとやきれを作浦風吹て送るかよ
みえ侍るとなり〳〵偵台ナトよりの詠ナん〳〵ニ
時うぬ涙さそふ分よいろミ川杣乃森のあらしさくらし
箏まきもまも分るれともさミつほれ涙の露よ秋なつ
里なわ杣森泉川の名よミあわえ東涙ニハ四季
移変ノ分ハなけれとも落葉の時色ハ波の色もう
つりうるハ杣ノ森ニ嵐吹らんとなり
龍田姫ニハ乃比乃秋風よ志られをいろ〳〵のちそにまかり
今ハの比とハ暮秋乃比之ニ二八深つきさ山の木ノ葉ふし
なくそし人の袖をとそめんと時雨をいろ〳〵とく

家隆

冬之部

高瀬舟しぬくいふりよ紅葉をれなかれてくる大堰川
高瀬舟ハ小舟之瀬をさすと云てし舟よなかれ

志づくとハきうしるんとたり色舟ハの部るよ紅葉ふうれ
て落きは志ぬくかりなるとなり
木葉ちるやよるうしく袖の色をかわしもさらそ行嵐外
嵐ハ紅葉をさそふ事をたよりとしてるおもなり
されとも此秋の盛ん後の紅よ成てこ袂の袖よあるを
ハさそひとして嵐のたよりとよなしなり
木葉ちる時雨や涙よ染る袖よまかるき涙の色とまる
紅涙の露袖よちる木の葉時雨ちるとや
時つりゆく雲よあくしれ数まれすり我か涙さきへかるき山の
数ふらくらし人雲よ吹嵐ハ我身を〳〵くすされとも
我よ落ちちる八雲木の葉のちりて雲よまかりし之嵐
の音ハまろハとなわ二字の分らきれ山と浮きした
る詞の風情うきわなるき〳〵物なり〳〵
山里の風すさ浄しきタ暮よ木葉ふみまされて物え寂しき

末葉ノ如ク心乱て物ぬかしきとや見ゆ 六義の内まで
金葉の比あると云べきにや

冬のきて山もあらはに木の葉ふりのこる松さへ峯にさびしき
此歌は冬やと言葉に述べてきこえ侍らん色々の木の葉を
吹ちらして雲の尻に残りとまる風情誠にさびしき姿
残る松さへのさへノ字ニテ落葉のさびしさ猶

から錦秋のなごりや立田山ちりもやらぬ枝にあらしふくなり
秋のなごりや立田山とかゝるは断ノ字ノ心にあり散
残る紅葉は秋のなごりのみなるにそれをさへ嵐吹らん
みをしく断トやあへ此ハ数多ノ説あり其の数やらね
んによめり

月をまつ高ねの雲は晴にけり心あるべき初時雨かな
心あるべきハこゝろのある也先だつる時雨さへ月に捨時ハ
晴ゆけるこそ心あるべきかなと也此歌大事ノ秀歌ト云

やよ時雨もの思ふ袖のなかりせば木の葉の後に何を染まし
是は時雨をよびかけたる詞也時雨は物思ふ
事なり物思ふ袖のなかりせば木葉の後に何を染むべき
物思ふ袖と時雨に対しかゝり神代ハ深く事ツ
いへり

冬の歌にあらずしぐれていつなるらん時なく見えし
布留ノ杉大和ノ名所也布留と
杉トノ事ナルといふ杉ハ深緑にて染れなければあら
みやうしへされ色くひまなく時雨ゆける杉に紅
葉やちらんト云心也いかなるらんとよめり
時雨のあとなくし晴れたる様の葉もあらむ哉
冬ぬかにゆとハ紅葉しあるよハ晩ノ時雨の綴
なくふかきなくあるさ様を云あるをひつ
残てと云まり残ずべし

世中よ猶しかるあれ何夜深く雲間の月の出やとおもへる
猶またあると八後ヲ経ノ字ノ心ニよまれしにや　ト八世ヲ
出んト思ふ侍レトモ出られぬ八おもふくしけしノ雲間ノ
月出かぬる様なるをよめり

今八又ちうそをまうけ何夜かひとつわけ庭ハまつの也
末葉のちる程ハ末葉にまかひ又ちらぬ折ノ庭ノまつ
風も何夜よまつよとや末葉といはすして面白きにや

晴くもる月と杉まさきてそよそるとつゞる此歌ノ月
杉にそ月ヲまつ三月のまくみえ侍るまゝに流るゝと月
乃ふ心ぞ恋しつるやうによめり何夜よまりあれて
還り出るそと月のことりを云やうなると也曾丹

今ハとてねるまし物哉何夜つる声もしみそとする月の丸
ニハとても八何夜ねる所よねかましき物哉さても夜深
の月の面白キニ心をなやますと物と云ん哉なるへし

小倉山みねの嵐に末葉ちれ猶梢まつ月哉こゝろ那
紅葉のちる哉惜まるゝよし又みえへ物まそ梢に晴ゝ月
哉みる也

秋の夕哉まちかひそやくさの月のうちにも末枯の也
下界ノ秋ノ夕ヲ拂ひ出して上ハ上界ノ月を極ヲ
吹末枯とよめり

霜むすふ袖のくしきうちなけて秋ねよ月も幾さむけき
打拂テ夜又下ハ人ノ妻ヲ禄らし物事ヲいそり霜結
比袖ならし秋打拂テも猶らし秋又に又月しさやうそ
寒打拂テねよねたの形をよめり

夕かりの萩の下る枝ハ枯まかりもえずし露ハ見るやう浅
夕かりのむかの黄ノそとうつしたきも見ぬし露見
えそれのさき此るま御氣しみれるへ黄ノニ萩によるかへ
夕かりやこしハつく萩ノ枯テハ露を見こや有るニトよめり

冬のよのなかきを鳴くる袖ぬれぬ暁ころの四方のあらしに

源氏ニハ其の巻ニ枕ヲ欹テ四方ノ嵐ヲ聞キ給ヘハ浪こ
こもとに立くるこゝちして涙おつともおほえぬに
枕うくはかりになりにけりと侍る詞をとりてよめる
それハ奇妙にや 宵ノ月ハよくしてねられさるを暁
ニ嵐吹ハさむく吹さまハ甚しくとひくるらん面白ク送ると
云ことよくこの哥也

霜かれハそこともしみしぬ草の原誰に問まし秋の名残を

狭衣物語ニ見えしき草の原とよまれて誰にとハまし
冬枯の霧の草の原ハ枯野なれハそこともしれすとよめり
草のはつかに出て見れハ白露をむすふ草の露とむすひ
出て哥ハ多ト云心や名残トをけるこゝろをまてみるへき之
秋の程ハ草のとよみあるらんといひたてるハや時雨の時
変ることよめる哥之

白露の玉とかへせしよしハいかにそとて
やかの山に〔illegible〕

志賀乃浦や遠さかりゆく波間より氷りて出る有明の月

さよふくるまゝに汀や氷るらん遠さかりゆく志賀の
浦浪 氷行汀を出る也 鴨の山乃そらをきる有明
乃月こほりの氷にや氷て出るトハ汀より氷の光
く遠ざかる浪間より出てくる月をいひて

月をよめ雁ハ声のうちに紀の国や吹上の浜の鳴なり

雁ハくるとこひけるる詞也 秋かせ吹上の浜の月を
みて声の鳴く風の音詞を残して吹よとやさて
ミる（ハうすくて有る独常に鳴らんとよめり奇妙なる也

風吹ハ沖つまてなかるゝ君の心をたり吉野波よおそく年ある哥

かゝる君とハ深りよせたり風ニなれて行かゝる也ハ君ハ
吉野浪ニトよめり心おもしろねとつきてくる所面白ニ粉骨

吉野なるなつみの川のかはよとにかもそなくなる山陰にして

河淀ハ夏みなとみて閑なん処ヲイヘり吉野川たきつ

てらやま川ナル中ニ歸ナル所ヲ鳴ノ居所ニ見ヘテ鳴

トいへり山陰ニして八猿(猴)の啼かなし

さびしさはいつはあれど景遠なる所は景より雪の降る

野と家と既面ニ見サ丈なる所へさびしさハ面白キ

んかゝや後成(?)の言よ　　　よつていつはせよとかきあらはす

同の月の氣よりもくらんの氣よや

冬草のまさしくの冬のさびしさよ雪ふりまさけてみえぬハ

冬草ハかれしといふ枕言也かれしトハあれしと

云ひや雪ふりつもりて卜ハ深雪ヲ積ルトハ卜しと云

庭ノ心ハ惟右ノ如野ニ所道世ノ時ニ月ニ参りテ見れ

て八美しとそ云よし　　とハトよめるとおぼしくて業

平ハ五男(?)ノ昔ノ事ヲ言ぬ人なし八雪ヲふりまげれ

なり我謝なる人八五男ノ心をまよしけれハ雪ヲ知

みふてとかしとよめりんノ時ニ言ふ人なるニ鳴

テハ思カルヘシ

よのつらいかねともこふんやあつと御覽ふそとまよ年れ昔哥

よの流ハ自分之我八云のくしそといかにつなき言葉

せまとハ死とともいかむ哥よりにや年の名れ哉ると

よめり

あらたしき年やワか身をとあつらんひきつ行彌よん年をまちそ

すやとまよみくハみえ移し古ヘハ多しこし弱よまりせてそ

ゆく流行詞とハ光陰ノ移りやすき事ヲいふ所為八

よくきこゆしけり

行年を小嶋かあまのぬれ衣かさねく袖しなみやらしん

行年を小嶋ハ備ニ也年ニテ袖ニハ老ノ波事ヲよす

老後ヲ欲クハ言ノ詞ノつきぬ所ニ

老の浪ふかしけるに力なしそれもみなれわか身も今あまの松や〻

ふかとしきそおくしやをワかりさハ床の松か浪よし

かりん

こ年も今ハ末といひかけて我文庵の浪越ねと

あけくんや

仙人のおるる袖ふれに菊の露なれともおもし無世ハ繰かへて

祝言のおる句縁之事なりよ　ぬれてかすれ山路の菊の

露のよりいへる千とせ我々ハ今をよ人ト云ならのよ

同じ心たるや　ぬれてゆかを聞ハ志かまらくなりけ

けふの八露おきるよ男まして今とせなりらんとや

君が代よあへるや是を行まき我色ハ色もしみよなる

言なる露のくしけなりき事ハ誰も以よなくしる

臥猫ノ枕ノ名ヲハ言よみえんする事なり花ハ絶で

よ出そうてへとも方氏てし絶さゆる事なる也花のさかり

ぬれてやをもくしの花の露あまよあまてる光いく世経ん

ぬれてかすれトハ露あまとといへとその句のおこり也

そしの菊トハ桃の一名にて天ハ照光ハ君非に其の汁事なり

神まゐるまへハいくよせをふるらんとや

高砂れし重ね昔よ哉ね　へし住の江まで秋のなかの月

松樹千年終是朽トいへハ松も千年を限と云る也月よ

ハ限なけれハ住いくよせれ我なる句はそこ之

春日山に是や一代面白いそ程よかれ栄なるを是よりへとは

補陀落の南の岸よ堂たてし今ぞさかえん北の藤

浪南円堂を閑院左大臣立られし時春日大明神

の御詠といひつ是も藤氏ノ繁昌ヲ思フなな

るへし

けふのねさしは日の前に日記まとよれけふの日の前ならて

朔日なるハ色れなる言の葉の枕詞によそへたるなり今日

落草トいひとて朔日の置トいつまてし序也

日落草ハ薤ヲ云へ非ノ非ノ非人なしこれるや

古今にあるしの山の山人へみるうまみて

きわとよめる也事之
神代よりのならひや八束穂のたわゝなる稲のたなひき
やつかほとハ八束有稲ノ穂ノ長キ事也長穂とい
へるハ瑞穂の大嘗會までのちみくよおもひやるを
云也稲春トハ天照大神ノ御田よ奉らせうれて来る
日本紀ニ委シク御座候

哀傷部

末の露もとの雫や世の中のおくれさきたつためしなるらん
末露とハ梢ノ露もとの雫とハ根本の
露也遅速ハおそきはやきを論する事ヲ人の
命よ喩へたり

花みんと植けん人もなき宿の桜ハこその春そ咲かまし
去年の春咲なましとハ去年咲ましかハ主も見るへきを
なと植けん人のあるへきよさくらぬよとよめる也此花ハ

とハ大事也能分別有て以て可書者也
露結ふよみのとはくみの萱衣をつゝむ神代のむかしの事
○萱衣ハ三位有り一ハ服衣二ハ山かつ衣きたる衣
なる衣と云也此萱衣ハ服衣之今ハなき人のことを偲ぶの
露結袖よなみたをしほれてあかつきよおもひしハ衣曲
ありとしるへし
もの思ふいつともなく露の身ハ冬の夕暮あはれ明暮
いつくともなく消ぬへきと云ハ心もなき露の身なれハ空の
しての夕暮の明暮しもあらぬと云や
あらましとあれ行露とおもひてけふもし御座候
各文字ニありよ袖ノ名ヲ云出ス事ハ思ひを述
此秋ハやそ袖そとをしのひて云法ハ不苦候ハ御座
とゆんおもひしと云んや袖時露とこそ消ぬへく
あはれなとも後悔やむこの世の事つきて悲しよもな

たより

離別

心ハゆく為の別よそよそに雲ゐうハ紀あかし忘して
雲ゐうハ紀と八文十八ニ四八緒を為ことつてと云哉
ニ出よとや文字ノ為書トいふ文上書ニ宗雲トモ雲ゐ
トモ書ハナルベシ

羇旅　詞書

和銅三年春藤原の宮より奈良の宮にうつり
元明天皇御歌

○とぶとりのあすかの里をおきていなば君があたりは見えずもあらん
つかはしける哉

文武天皇十一年藤原宮ニテ崩御母后元明天皇同十一
月即位改元アリテ其ニ和銅同二年奈良宮造立
同三年藤原宮ヨリ奈良宮ニ遷幸之其為トハあれ
ハトいへんとての枕詞之飛鳥里ハ藤原宮之あたりなれし

昔の京や君があたりトハ文武天皇の陵の事也彼陵ニ
御輿を留めテ御名残ヲ惜ミ給テあそばされける
御製也吟味限ナキ歌ナルベシ

天平十二年伊勢国ニ行幸しありける時

妹にこひわかの松原みわたせば潮干の潟にたづ鳴わたる

和歌の浦ハ紀伊国若松原ハ伊勢国也いもにこひとハ
旅なれば都の恋しさ思ヒ也ナル、旅之潮干の潟たづ鳴
わたる如き風景よそに妹にこひぬ哉といふ心なるべし

東路のさやの中山さやかにもみえぬ雲ゐに世をやつくさん

さやの中山ハ遠江国也さやかにもみえぬ雲ゐとハ古今の遠
江なるさやの中山なかなかに世をつくさんとハ此まゝにく
ちはてんとの意

けふ世ヲつくしなんと云ふ事也

人を思ふ心ハ雨にしも非ざる也やとあるも何のなき袖ぞ
まやといへんとて歌なるトいへり此事ハ行人ハ

旅ね
うらみつる夜や古めしおもひきとくくんの事なりと云へり
旅ねする芦のまろやの宿れつまぎりつむ身のうくなり
田上ハ縄信マの新羅也なれしろハ枝並而旅人の宿をとる
歌京也されハ荒まくりつむ身とはやきそやと行るへ
ともかくみんと也世をそる人の心あはれなる境よ
かの又一説旅宿の二十一ヶ年二三年まとりつきぬる身を
みそしるし へりけと云々也是も三年まとりとかそいはく
んかよそ也聞ハ
立くかえもきそしん松緑や袖しまの篝や浪よおろうまれ
いうそ定家マハ有一節翳下定られ作りかハきこ
えるかいさ山家の風景にて感ともぞんとおもりかきしこん花
旅の玉川ノ鶉也浪よおしよる斜 句也
草よくよそあきろの濱千鳥なくく出しあとの月 歌
真ハ津濱和泉に入ル名所ヘ君をきそあきろのたまま

なくちろの名残くれなそきとよよきらく也此事なり
三ヶ所の濱千鳥ハなくくと云ん枕云之出名所
ハ此濱を出る名残なん（三とし）よ八月歌よとくと也
地ヘの露しら浪波をこちそもはもしらぬ袖の月歌
旅行のならひ此旅ハ露をしのきて濡る八波をし
のくろし哉りつよひとろのよりあよハ旅行も
ならぬ袖よ月をやともそそとするや
歌まて月をあはれと思ひしを袖もしらぬまさ成る也
此あはれハ面白中ソ此すさひハなくくさゝや歌まて月
をあはれとハいろしとも慰多かし笑つゝ之旅三ヶ月
なって八慰なし歌の名残よハ月の面白けも行まさ
まさろとより工夫の面白中なるへ
月みるとちきりをきてし古巣人のくやとひ袖ぬらさん
古巣を出し時まよそ出ん時も月はみるへし とや

秋ハ唯た月にみて古人の心や月をみて我ことく秋
ハかなしからんとおもひしや下の心ハ笑止にしよらう
も月をみるとも古人ハ忘れやかなしからんとこゝろ
ろおもはれけり

古への心の西行ハさまよひを月にそちまするさまの中ニ字
まちちの山にあて之れハ我のおもる動きつまらく妹恋しし
せう人人を敵ニ思ふをうりさ後の中山ハ夜に駿河の情ら
ひや旅行ハいつもくるしき中ニ旨ありふる
きハ流て何事ハつくしんと思ふあまりに名吟
を月よさそひて言せしとの旅行の後ニ何事もあれ
ある此道へ通ふ人ぬや旅まて八月日の外に又類なき
なかきあれようくよあるに古事の在ると云ふ人に要ら
こし此詞のつまらくといえりて心なるへし

旅人の秋なきに心を秋風に夕日をひしきおもひけらし
なりぬるをこゝろの夕陽のはなら旅行のさ夜之しつく
まつ宿をとらんとそゝのしくれけえしなを見あるをみ
て里のもときまでとよめり

古も秋ハ何ゝへるこるみえて風の音おくるその情あはら
小町の藤原の秋風に古への秋の夕を思ひあはれト
云へハやさしく古への心と小町の藤原の心そのくつ和歌
トや

こゝろまたんやあさ夕暮さと思ふあるをとのなす
湖月まをもとよむ事ハ伊勢物語ノ名より出たれ
をいたつらまたつ尾張月とハ抜山の端を里のある
所と云いて行ところに湖月の高山にたつ暮なれま
里の老人にもあらねまにころまこゝろをおもる古へ
さみをんつゝむとも旅懐ノ心をもつへてみれハあはれ
深キ事也

又松山一の句を入にて
得るもつよ殊の句の
かくよ人の
其の御よ合を
ある枕山まやかれ
又松中へいつけ
其の心我話の出ること
かつ人おつかいまなる
つまりとなりいてやせ
うち見え所に殊を
するやかれしとも
都の仏話よ殊の
なく
うらよ
つらつく
うふを
やれよまし
いへいの守
うらむつら

松と云ハまつ夜もおもかうきたちよたつのむら雲の尾上に
雲のたえてハ定家卿懐紙にけふも日の入ぬる
山よ光のまさしく光のかりかくしてよそゆる雲の
末々のよ似たるを言ハ文殊の真如也さる程も
おれとはまつ夜なるとくり見る雲なうて八つる
前後すなハいふもタ暮ハ雲の子とよおもておりを
云を一事なりして立ちなくてなきこしてる事
其山の名とに秋や称たる不便の言人
名は人の者ハ言葉よ殊とそ作かることをそりみる他
言ハ絶さてしいり其の言葉なくしくなる利也殊
とともなると云ニ絶けり事なの中なれハ殊を
いふへもあへし情閑と云しん花山の風俗を惜て
節ニ倒よの至たりしんよ逝する言なるへし
枕とそいふもの事よ契るん行とらりの北への夕之れ

世中ハいつこもはしてるらん行と傍るをとて宿と
さらむる千万葉の内いふまてを枕よ定るなりひとき
猿の神也
是れうんまつとなつけて中くよいふ者の山の岩の松風
行年の立別いなるの山の名よ同名人よりも安舎
定なけまるの中くよまつとる言らせそと有り
契らぬと一夜ハ色ぬ清見かゝ浪よかうりあつ月の影ら
我を浦よ猿といし雲を文浜よようりあたた
浜の雲も浪をうつし也雲と我と契りかなよし
こりとも波浜よの神言の郁りそ又よし面白く
若そしうる言也
有明よるのやし〈吾立まの松まらん神よ浪やこまらん
本の松中の松末の松とそ三所にありとも也されとひ
とつよ末の松と云也されハ末の山といふそ松とある

もらひつゝや

さゝなみやふるさとかしあれにしきをこゝろしや都は花やさかりなりけん

さゝなみやふるとは修僂トモ龍鐘トモかけりあれ経れて哀也

さゝなみそはかくやきさゝ来の字心こよりさま

ら志賀なれハこそ山海道の面白キ所と旅行のあ

れと流浪と羈旅と言ふやうに嘆て面白キ所也

象潟出羽国也

秋は好きされしを旅の哀しみし胸あふるゝ風

源氏物語須磨の巻にうちひてなく旅にある浪ハ

こゝろもとなく風や吹らんとうたひ行れしなんとさや

うなる文ふくと云義もあり旅泊古今ノ方をとりて

こゝろやすく旅のまはれまに云わたりの風なる哀

みちのくも只秋にかけとや

秋の暮もはやなをとうつ山夕霧にまよふ竹に蕉みち

あらハ山中なれハ夕霧ふかくや名のよくや秋ふかし衣

うつ川ゝおそらくあらんとおもひ居りけるにや

秋よしを月やともしとハ笑をとれ浪ハあらしや川の山おく

うらの山をこえん時やりしところもうらんとハあし

あらさりしよ浪ハ知給らんとよむや

立田山秋ゆくん此秋はみよの梢ハあらくれしさわりなり

秋ゆくハ我もなりうし秋よまみ梢よくる

これハ家秋の名ハ深しとや

年をかけて又こゆへしとおもひきや命なりけり佐夜中山

佐夜中山ハ口ハさやとよむ旅宿なるに此時ハさ夜とよ

むなり西上人老後ニこえし此山をこゆるとてよまれける哥

なかりし

みるまゝに山風あらくなりにけり秋もくれやよさむなるらん

こゝろかしまはは此年の名もよくの服部瑞的の風

長世

京なる人もし張懐の事しらすは寄心よみてもそ
ハ嶺(さむ)ほりへしとおもひしつしやられるはんなり
とくや

新古今集聞書 下巻

恋哥一

よそにのミみてややミなんかつらきやたかまの山のみねの白雲

此御哥のかつらきやたかまの山の峰の白雲の立ゐもみえぬも云
とこそといへ第二の句をそへてみる事也此哥ハ初恋
の哥(寄)しハ見んからくるゝ人のはまよそのミみてやミなん
けそいつあらんとみくはへたる極なるへし
是ハ山のさかるはかよそく雲のたえにたれつゝ我こふらく
ハ此事能アリ高キ故名ニ依テカハルヘシ故ニ是ハ人也
ちかよらはしるる程なれハうそよりかゝる高き山間

なとよ庸をとおもへこゝさんとて隔テ乍ち思ひはつらする ほ
春日野のわかむらさきのすり衣しのふのみたれかきりしられすと
伊勢物語ノ初ニアリ此哥ハ閑ヱ侍リ歌ハ春日ノ里
ナレハ若文字ニとけるや若紫とハ女ヲ見タトヘテいへる紫
ハしのふすりなれし心之まとの乱限ナキトいへ人ね之まとの乱
トハ思ズリノ衣ハ紋乱レタル物なしハ心乱れシヨリ
テおもふや限リシラレスハ心の乱りモナキヲ云之
つくは山は山しけ山しけゝれと思ひいるにはさはらさりけり
古今序ニ筑波山ノ陰ヨリモ茂クトイヘリ筑波山ハ三ナキ
山とよ云事にハあり端と茂中山なりともそのいらえサ
ワリモナリいらんとやへかよの思之事こちに不限一定
ハ道(ミ)トセ
霞のくるゝ浦にかつくる濱千鳥あともしるしとむらのそれく
跡をつくるかすなと文なとハ跡なきも無返事ノ也

あはれハいかにおもふもなしとあり
秋立ちぬ風もさとしとよく露のこぼれきみなども多よハ
ことくしといふそもたゞしくといふも月にやはらぎもなく
やうなるに夜之けさ消ゆる下ハ今ハとく露の底に消れ
トモ見え荻ノ如リ多くハ出ニトや深の花のひたるに之
歌意ハ松紅け夜の深くして見ハ萱の原に風さえゆくなり
もくさとハすのくるとものつきや松ハけ夜に深くして見お
なれハけ夜ゆ書ニ貢テ多ツキ安キ萱ニさえゆくや
うによある我意とよりと我意と云文字大なる
三井ハふら置の云ら作タリ是ハ我意のニ夜つとりはな
るく深くて松にけ夜やよみらん秋のまなれば
作れなりなり出へしこゝも此夜ニ貢へるとよ
かり見萱原鞍山の東ノ麓ニアリ彼所ニ則和尚
堂トテ此作者ノ住記せし所なり
あはれそ神を堂をつくらむかやうのよしつゝへなし
堂をとこのよけくこゝろなといつゝあらそひのよかにしてあつめの見作よ歌と
作れ神よつくらるゝとこゝん時ころやらことゝくんゝみつる前の云らなり
歌ハ路よ多くなくてねなるへき見のゝる事れよりわき
思ひあはるゝ哉と歌し月日のうくてなるくハ必君ん
事れよりしてせめと思随け命絶ずトいへ死しハいつ
るつ名のりたらんゆをよろく思ゆんやよりのゆくまた
よりかやきんすめんと書れ事をいひつる約や
見れてハけるけるに云ニテ君みゆ我のを見りてもへる月哉
我のを知トト云ニテ君みんをよをくそれたり死しそ
思ふうかと云ヨリてん深く時とゆる
作ら有れ世らうこゝえんと云ふあ根とえん作けくされとらはれよ
作らきゝ我根てむ又いふと思惟ヒタル有すんへと所まり
一向積ハ一文ある者らハ根ラテモ後ハツへテしトモ所来我タノムん
あれハ根ニトモ四ハ又トや
夜とそハ多のまなのうひるみれまんハ四ハ夜人とえておやみなん
世俗ニ在れむ事哉事よ見れりると云中キニリヨメリ松ニ

コリモリりゆらぬト云事モアレ一向ニなさこのよれぬるとや是ハ
まことハ只今常ノ人ニなしてもされすさて今やみやく
と云んやゝむとハ我ノ縁也俗人ノ心てちかるまのりと
思ふ心もみけるく紅葉散かり此るもなのむ事ニ
ゆりと云事もよめるとや

難波かたみしかき芦のふしのまもあはて此世をすくしてよとや

詞つゝひ優なる句之序なりそのよくかなしき伸たる文此歌
字難波かたトハみしかき云出しタリあしのふしまの文字ニ者
ノふしアリ是ハみやしミテ君ノちかや又ひとしとおひつき
稔ト成モアリ能く分ちて又へし我ノ心ハ且初ニヨリ以
来人ニ縁リ求メ羽すも逢ふしりモクダ中或モ
程メテあふし或ハ文かけも離レスメ年月ヲ重ヌ之
ハひてせニナト只今アテリタルよニ歌テノ云タル方へ
短キ芦の節間トハひとつのまもトテ云んへの極ある

凡逢ハカリカタキ事トソ
東路の方ハちかてなるひとしち常のことゝ思ふわしはりんとおし
ことゝちかとゝ又まとしの事又ところけ又ことちかる事
なとも云也此歌ハことゝハちかつとくの事中ヲ分けん
ケリ常陸常ニ説ヒアリ一説男女等ヲ解テノ程ならは
ゑゝう又ルニ自然ニ給ヒアフ事アリ又ヲ夫婦ト定ルト
いわされハひたち常のことゝハちかうとく云もさも有へし
えんとらもあうわと云ハかノ向あうりゆとゆう為之
あゝき此歌ハ是此又此吹入之し我ハ君を忘んとおもひし
る逢ノ思近江也其葉ヲ吹返ヒトハ人ト縁テノ又十
トモ通ノ事モナク成テ後ニ又忘ニク成タル時なる之
我力ハ君ヲトハ縁又ハキワハ思切テ之し トも思ヒ力又
更ニ忘ニクナル程よ我力ハ君を忘こそんト思ト
我心ニテ縁タル様ナルへし

よる神よ詠うミ渡せよ渡干より走事ふし又ても言うん
多く詠ミ乃て文字を作り印テ侍しハ我ニ文ヲ背ハト
云事ニくよわり君ニ走事ハ跡ノ侍しハ文ヲ見テ
君がことやむ思ひこハ下ハ思ひし嘆思せことや
いはましかの橋の中にてよわりしもそえぬ身と成なん
久米路の岩橋ノ事　昔文武天皇ノ御字役小角ト
テ優婆塞アリ金峯山金剛山ノ間ニ石橋ヲ渡サ
ニトテ彼一言主ノ神ヲ語ヒテケんニ其容醜事ヲ恥
テ夜ハ渡シケんカ渡ニ絶サんニ夜明ケリ物ノトゲ又
事ノタトヘニいはる事ハ此言も思の不通身ニや成
なこいはせニとや石橋のよるの契も絶ぬへし明クヽ
ひときゝなき神ともより
たれそこの三日月ひはらも言ふなくま思ふしも言そぬ身と
女ノ枕ノ室ハ多りてこそとこせ侍るかと詞書ニアリ哉

宿ハ三条ニよわ山のことひしくハし見ても事あまそよ
又名ハ三條の檜原ト云事モ知ぬ寺ツヽナリハんノ
枕アリテ此君アルトや
ゆかれ我侍る母ハ梶とろしての舟もならぬ恋れ道
由良ノ門波アラヤ所ニテ雅渡やんハ大海ヲ渡ハ舟楫
ノナカラニハ便ヲ失ヘキ事やしる母ノ如リワカ恋路
ノ頼ナク行末モミラヌ又此之モ事なきいかふし
きことの人思と思ゑしてみるて
雅波ヘいはることより行ちもん道と波よ身をつくし
思ひ入今ここ有形し雅波なる身我流しても何人と
ともにこの事言ふ作の言人見我とるて日大ル言之哥
ハ嘆しクルことみを流てしハ波のまにまに枕ならバ
思ひてよよわるまゝて
はよのゝるそら我浪よ傳ハるなくきれ涙を流う得るれ
ゆる

伊勢の浦によろそふなみりをれるれらハ流けよあをそ
出るまもきれあのなりくされ涙ハ君なれやとれいふ
ひとつときくろるなりくされ涙とハなりくさまねと云ふ
よ出れり人我色くこいそも流れ身きなりとよ我
名我なのりつていひよれともされともつまきなき
またなりくさまねと云ん之なりくさなむ我心俺ハ上也
能ハ工夫大切なる事也よくよくノ沈思ノ事十八(三)

第十二　恋二

前大納言隆房中将に侍りける時右近馬場のひをりの日
まかれりけるに物見侍りける女車よりつかはしける
見もしれぬ人ハされと知なりけるなつかしき心ハ人似つ
右近馬場のひをりの日といふ事古今伊勢物語に見えたり
帰饗事抄ニ委ク見タリ業平此所ニテ見ソメテ詠
ミもせぬ人の恋しくハあやなくけふやなかめくらさん

とよむされたるよするをらぬ程にあやなくなりていふん
そのかのをしそそるくなりけれとよむ又古今伊勢物語ニハ見せ
みもせぬとありて恋しきおもふなまれけれ
あやとあり是ホ詠ノ合テよめるなりてなりあ
私にとハ是付の例と云ん之

山かつの麻のさ衣おさをあらみあはて月日や杉ふけるいほ
賤のあまれ織やき衣おさをあらみまと遠なれ
やあはさまぬ杉枝のそよけの杉のあれあハ間ハま
せんとの我様そらくんまさトハをさの男ノ事也と云人ノ
下ハ麻間を事ヲ麻ノ衣ノ機にまかせしよを縫ヘリ山かと
をきそ麻ノ機衣杉葉ハ庵なとよくとり合れ
たる也之

我恋ハノまのろをれくのを行あそれつりなれ
色やうつれ衣やきこえきの行あひの君より

霜やおくらん此歌ハ 千五百番 下ハ 秋 五ノ棟に升
ちりくるまり云やさしきところときに思はれたる
きとこへ升ちりへたれなり増きあつれとよめるや
まよみのあはれ秋よ吹あれ塩風をすると八思れとよまれ候
なかれれハなよ世なれれやまよれわまの塩やき衣を
我らん秋よ吹こゆ塩風なるへよませてあり
塩風ハ吹ても秋よ多かるぬ之あるへもなかしとは思れ
とも忘とならよ多かるぬよしや
愛をもさゆん為我歌述うらめる背れ秋のなし言は
此歌歌きろくより右へ述へあそみて又秘の文字へみ歌
哥之
多く秋きし浅ちか露よ秋みて末葉なり愛着のまひち
秋みそいひしなるもはかなくよ事の事なかりし
くらくもくもそ思はれ此事なるとをそまるへしなる
ツまなし

いく夜ねられ浪にさそはれてきこゆる川秘にむかふる枕なるらん
奥山にてなきりてあつる時にせきむかふる方なる枕若の
又兼輔ハ忘を知る秋なる名よ和泉式部枕ね人き
さいのなかへも家なりあくれ出るむかしもこゝろ此和
まてもなるよ在れ歌秘抄ありといひつたへたり
和泉式部が歌ハ魂の事を詠たる歌也此歌ハそのとゝもに
いそくなるなくてし波よさそはれてき真川なる
と云事よみて又なり
第十三 忘三
忘られの身まてハかくされハ命ふる限りのいのちさへも知
何来まてもかくし忘られしとハ契かはしゝ来ハ恋
思ぬ世なれ恋人此恋をぬきれよ今も恋そよし
とよめる哥之
あふまでのいのちもかなと思ひしかん人しりけるなんなる

逢て後の哥也あハぬさきにハせめて人よ逢まての命をと
思ひしかと逢見ては逢ぬまへハ命の惜きもされ
おはれぬ其の命をもかへまほしハ惜きとよめる哥也
すの庵のさびしき業ふる詠ぞやさしくうちとなる事
さびしき業とハ賤女ノハタヲ織ヲ云詠ニ其やさしき
業やとよめるといへん席也両ノ分ニテハ何より流中ニ
や一説ニ哥ノ始テノ逢てみる事しさて我心ノ奥
モナリテ解タルトヤ又解ルヲ人ノ事ニ一ヘハ意ノ事
言流リ侍リ我ハニ云テ義理深ク面白キ也
あけぬよるとも明ぬれハ憂しくそれゆへる也ハ深く
あさかりしハ我目リ魂ハ君ニ見ルトムフ心也人にうき
袖とゆきこそあくとふしある身よりけても源氏
よまる八雲裏ノよめる代あつまと云之哢リ飽又トよき
なせり此哥も月人之世ハ源氏此あの哥之
秋霧のはれぬる霧もはれしえんきえかくりつる心まよひぬ
消えるトハ消テ又生出るさまを云詞也されと此哥ニハ消
テ立ちつる有ヨフヘテありつると云詞ニアリ古
あぬるよふまひくる詞也
心ろなしとつゝむりのことにあきの羽かきはてき数に
鴫の羽かきとハ鴫ハ必暁羽かきをなん称也君ゆゑに心ろ
暁かく立わて鳴の羽かきもおもふとよめる
哥之詞つゞき古事の哥也
庭よあつる夕けの草に秋露や叢まつる月の隠なるらん
夕けトハ夕ノ事也其そしや草の名ニハ非ス
大井川ゐせきの下ゆく水もあらて叢やそある
井せきハ水を堰る物之ちゝみなられ影やよるハ哥
稀なると云義とみまよまかし叢ニハあるぬと云つ
けくる哥也かせ絶きのしるハ思はれなるト云んも是

なし又あれハくと云秀句なれへし
あらきなくはらきなきの谷もなしなと夕されは鳴なくらん
嵐ハ夕ニ吹ぬ之昔より人哉ある事ハ夕ニ限ルやいかなる夕
夕ニハ猶すさましきに此しき限や断腸ノキワニ有只
夕ノ物なれへし　暁風僕意ト云心や
関やいはうハ何なる風なるも松に音あるならひなるとハ
侍るを松にのみある事言ノ物也　心なる風にも松ト云
名を和テ音信給んニ我相ノ人ノ毛絶まても心ト思こ
給こなると思ひ侍ると云所極なる所哀也いかまとある
文字ハ後ニ才中リ入ル事也面白キ文字之ト也
今宵と契りしと我意ルハ此夕暮の月やまからん
今宵人又来んと云朝やいつの時やそこと人ト思ひは
此哉又ルハ是れ君か意なれ給ハ只ハ夕暮ノ月まで待らん
ト也れへこ月や給んと也れへこ此の字

ヨリ入テこれハ能ワカらりし事之なりけれ所の修也
君か代と祈やていらぬ様の事さいかくなき侍れ山の端月
君こそと祈やていらしこ余ワかりと遊ひけ霜ハ云とも
足引の山より出る月待と人まてとひて君をとこそまそ
二そらを年言ニノより月ヨリ入まつこつけまし人と也
いかくなるうけを意未だト云秀句也月も未だ山の
あなまやきらひてうつる所となみまそと也
足引の山のみけさき頼みきそ意やきこえんあすしと有とも
山のみけ未頼ひときそト云人しまとも意にんのむもとも
有りしとこそや意やきこえんト云ハ重ことも有そくいつまそ
こえんと我しこ所可なくて
東路よろ人の名やれこれてつつのまもなく意やきこえん
はのまもハ時の事もト云也ふる無意ノ乱つはのの
まもなきト云ハつめきつもしなキ心也

我なかはるまじき我なかの上へやあるとし波にこすなハ程ひあるに

我なかのかはさしなれし云詞也我身をつらきと恨み也よ

人我をよ捨ハよも何かし世こそあらハもつ恋ニ逢

せよと云けしの上ハ恨み也や

多くのふかき人のちぎり我をそこれハ又いかてみかへ

恋の為にまことしれ後まてとちすえたるかのかと八秘蔵

をみと也めて心ろへ此心ハ能叶え給りけれとくつて

世俗にたとへハ能と有トモかくあるトモなをとおつことし

かはりあらんまりハいつとをさら後にも月なくなをそれまた

まへよかるあらん浪りニ人ナ云つたてそとなるくし（まき雲）

月にこそよみてよくも浮雲ニハいひ侮られん人すこし

てよかりよ我人これとひつてんねさとまあつそれや息

松山となまりて人ハつれなくて袖しを浪まのこる月りけ

契りきなかたみに袖をしほりつゝ末の松山浪こさじとハ

云契りし人ハつれなくて我袖の涙ハ波ノ如ク越れと

松山と契れるハ契りノ変スましきたとへにひくうた

浪かゝりたる間涙の袖をしほりて契りし事ハ[illegible]なく

成ても此月ならり変せすして頼るとある也

なかひさしものいつはりをせぬこそ誠とせしまの[illegible]

歌道ハ道もなきまてありけれ流れなき人（もとをきこへ）とかわ

とせしまよ我ハ偽と云事を知れよ人これニ（そり人ト云ミゟ）

誠とのをかなそ絡縦ニ一生の道生下成まて約束をせ

為ても袖よかくへきことにかなさをきつきまなの露れなよ我

源氏末摘花ノ巻ニ為ても我これとハあらんもかくやうき

なきれのまれてゐを深き道ノ露ノごとし八個事難迄

末つむをハ忘れても程より又忘れしと我方ハ為ても

ハ彼人方ナキト之

忘れまハなかれし袖のはや取らん形みに見よ我涙成ても

なをひつかねなくに明の空ぬるれ秋氷ハとけもそえける
我とくにわするゝも忘れ給へとハ秋の夜もこひしかるらん
とハわトノんハわすゝにハ心のまに出給へしといたく歎
らるよしや
いまはりとこんまでの元氏雲月日影そこに物おもへとは
やそこ人とそれ云侍し月日陽て此頃に物おもひ人とは
いまはわきトノ
あまるらんの心にまかせゆかりもみしあれ暮をたれにさゝめん
過不及あるにやあはれなるらんニテ事トモ夜ノ暮ヨ今ハ
謂の云出てきと云事ナリ暮ノ字ノ定メシトハよるも也
契きやあかぬ露とさしあかの月をかわれあはれとし
嘆ハわれ人ナレトモ契ラサランに物ヲトト云也嘆ハわれとき
物ハなしと云事の面影ナル人ヘニ
忘れしのいまにいまに成人にあれかし一首ハ秋風を歎く

末葉ハ風に落しハ忘れしの云葉ハ跡とも成ぬらん身のうへ
し一首ハ秋風の末葉に吹らしくれしに成るると
よめり
はらてたまうらみんとおもはわさまにうらみん秋風そ
よそにしも心のまゝにと吹てうらみし秋風の音
風秋風の恨よと催すやうに心の音も吹人へも也
さやうにあらはれも恨の面影物をとせ
あはれとその人のあとなさはん物思ふやうにおほからのハ風
此問へハ物思へに限らぬとおもはぬ人へもあはれとて
て慰てのしと人
萩花もまとひけるらん乃ことにすゝきにまねく人の音に
まひくに枕をしらぬ人ゝ世にしいかにねかなの暮をみ
へりんそしを事あまりて事あまりに事ありぬ人の旅
あとと云説や君かハね世への物あはれに思ひつくし給

ひてり姿の遊行かへるへきと思ひともまよひわつらひたる遊女
袖の露をあらぬ色にそ染かへるらんと此句とりなす
人のうつろふ秋の歌にそまれハ我袖の露を紅涙に
成たる也消かへる下ハ身も消るハ消て更にまよふ事なる
色しいはるこの心のかへるとく我袖しおほるぬ露よ
うつるとよむものなる也袖の露をいつる所也
むさふ思ひ出らしおもひけるよりのしらくあれとおもひけるを
そもおと同し色之花よそしやきたる家と云説あれともそれハ
此花ハ嫡の事なりて花咲の心のかへる事を云けり
たらん之花やく色嫡ハ見えみしぬ哉の花るわかたの哉
かゝるとくらやゝ色くるたつの事や
心しそ行くかし云う篠三條の山杖梢のゆふされハ
我恋ハこそれ山本恋しくハ来てもひきまさせ枝かへる
山本寄れとく君こそませとあの院よ君待しハ矣とハ

みえん枝の梢ハかりまてといはる君恋の山本寄の名や
うめや
君まるつゝきん名のおもる花に浅深の堀千代のらんいかに思ひ色なし
君か山寄のひくらよ思ひも名よ人のころ花おくとてもまるへく
人の山本へ入らんも多深井浅サツミ人といへる事やせ
八君ころまよ人の心ハ堀千代の深ミテ浅キトナラハ
信濃濃や堀千のことよ朽かりてしいはるひなすハ我か方なら
と云寄り下にうすくてもあり君まれハつゝきんの奥な
れたらいはるひなしと云よや
うりまありけ夜ハ袖よ秋くりくいくらくるを往きてしまり
秋かけていひしなるくしおなつくよ本意なるへしくえたる
秋は必あり人と矣いひしトきさハなくして付夜ハかり袖よかるよ

才十八恋
白妙の袖のわかれよ露落て身まむ色の秋風そふく

白妙の袖のわかれハわかしわかれと云かはしつゝゆきしつる人白妙
の袖とハ此衣事の事成るや又白妙トハ袖トいゝん枕言之袖
のわかれ露落しより身にしむ色の秋風吹てさびし
く成りぬるを　吹ぞれハ身にもしみける秋風を色なき
物と思ひける哉是を本歌とせり身にしむ色ト此
歌の袖をも深く心をあり
萩の葉や露のそしきもうちつけぬかくれぬるかなやと
打つけハやそれのとまりつるトハこなたこハかり結ラスカ
なきこそのとまりぬやんノかり結ヒトや本ヨリトニは
萩の縁語之
あきたヒ袖よみなと吹わくれ庭のものよりしきたま
なきたヒとハ哭慌たくナトニ初之のふこし毎のより
しトハ左まゝ小さ夕ん人ノ事なりくしよそしの
若文字ハ過ごし云ノしに飛久此やとある字之のふこし毎の

あるハかりよと云んや高時ぶ今此ハきね給へ事やとある字之を
玉姫の大ニ出見旧又善る人の事こあつ玉の光ハかると人ハいへと君
のうえひしたりさくるこそわけし文字ニ同ニ伊勢物語ニて
をけん面白ニ中ね二条后ニ通ずる事識よりこのしき
事なしハこしけなきの深きりいリ人トテ虎狼もなり
しハかりよといつり恨の深かきりなき
播之
玉の緒よむすびてもとむるくハみれ中もみし
玉の緒トハ清の緒ならそ玉の緒之はら大事ノ事之
無大浮こそ清の緒ハ石ノ中ヨリ涌出れ物之
されとも緒ニテんかりこんトやのしめてハ石の中より
出るとても類へることく今のこく緒人かくる人とは
観ずん緒なしトモ磨ノ心ハ称し又粘なしハ縁ニ気へテんかニ之
トや石ノ中ヨリ出れ水ノ如きかりこれハ多のまうつくし

とそ云ふ言也

歌にもゐる聞てそ人にまよひ[illegible]

我もおもとハてまよはせ給ひそ如ナト云詞也聞て

とてうらみ給ふ康によそへていへり我もまよはす時ハ

人もなけきしとも也今てん[illegible]く成て[illegible]

の[illegible]けり[illegible]ハ女人[illegible]く成る時ある事

人

夏野ゆくを鹿の角のつかのまも[illegible]

小鹿トハ鹿ノ惣名也[illegible]鹿トいへり

[illegible]夏野ゆけトあれハ康子ナトノ[illegible]

角の生初ハ只一束中あるや束ノ字のつかを

よめるとハ少ノ間ノ事を云[illegible]

[illegible]

[illegible]人下枕[illegible]て笑ナと[illegible]様人其

髪[illegible]女の物とよ面影ノ恋也之

夢とよみし面影も[illegible]

過言[illegible]ト云[illegible]也一夜の[illegible]とハ夏とも

云也夏と[illegible]又[illegible]ハ[illegible]

[illegible]夏とも[illegible]詞つひ云

語[illegible]面白き之

[illegible]

今[illegible]と笑し[illegible]今

[illegible]と[illegible]今ハ笑し[illegible]

[illegible]人の笑

事ハ[illegible]成りてたる也

[illegible]世[illegible]笑[illegible]

男女中ハ[illegible]世[illegible]笑と[illegible]世

[illegible]笑トハ[illegible]世[illegible]笑も[illegible]

うき身のはてと成る事ノなけかしさをよめり
なかれいそんうれるよきしうしむかしの袖の例ハなにれ
昔とめぬ袖の例とハ我袖なれハ昔もぬ例也
君しまれみちの往来よき君しんも一人のよりいまも
君しまれハ君しもあれハ君しまれハ只君しと
云詞ハ君かよの往来ナハ定メしトモ我方ヘ来る人ヲハなく
君ハ君しとやろうハ人や昔見けん人咲花の名ノ深
同シ生ぞしらん人ありわりけると詞云ニモアリ也
君て絶えこしたり

今ハとてあひきてしまへ野中のいのちを
いまハ此野中の清水かはれとのもとのいのちをうたへ
野中ノ水トハもとの妻ノ事ニ…へていひなす也
おもひわひやみのみと山のいつはりかいまと思ひて
我一すちよるものをりて山の松ニ我身よそへてよめり

我ハ世ニ世三ニまろひ侍しトモなけれハ忘れやし侍トハ
我こそやとつらひてよめり
出そいまし給ふまほしかりしを今わかれん
伊勢物語ノ詞ニ二日ニ…わかれて下ル
家思ふ人ノ額なき事ヲ…
君出し給…我今日別…ハ
んと題ニよめり

衰へ哀云年ハ…
五節ノ此内ニテ見侍ケル人ニ又ノ年つかはしけると詞云
や小忌衣ハ五節ノ時ノ装束之大忌衣トモ云トアリ
非人ノ衣之日蔭ノ衣日蔭ノ葛モ同時ノ具之ナリて
とくといへんとその序なるへし

長夜のつきぬなけきのたえさらんいよたへつらいかな
長き夜とハ後世之今生根後生までありつきて

ハ生命のかきりても猶よまる人とし之訓つきこ託なる
柱なりとも?しく吟しテ面白キ事之
其のうきし人ハつきもあつるをこいしくおもいしるれ
世ノ憂を人のつきしも嘆息せられか?しき事ハ
つんかんしてきよしや
牧なりハ?ある?ハやはなかいかにもこそ誰ぬれとよに
言ハ能吟へ作り賤ノよしと心ナシ只賤キ事のみ
まいとハ寂ノ字をよく心ヘテよめり
むくしけあけまくおしきあくしやむとかえにもなれそ待ん
明まく惜キあたら夜トハ明行あたら夜ト惜む也
衣手離テノトハ人ト衣ヲ重テ寝ぬ事ヲ云こそ今?
逢ミし夜ハ明ずあつら夜ト惜むこか独寝テ見り
逢ヌ夜ハ明ルノ事ヨトニ
逢こと成ありつゝなくてこといなるなきかしかれのこと

覚束なくてトハ変事ノ?ら?し定又何也露のおき
ゐるとハ春秋の?しくらる毎之槙なくくしくゝり?
わくる袂なるへし
はしらん野守の鏡えてしかなおもひおもはすよそなからみん
野守の鏡トハ恥よある水をいつわり首雄略天皇野
行幸ノミ狩ニ流鷹ソレテ見人ヘ?リミソ野守ニ御
尋有ニあれもいひつ?に流鷹ハ此トアリタリシヤそ
尋給テまれさせ給へハたそいかにして外にアル鷹ヲ
ハ知タルソト流尋有ケルニ野守ノ申せしハ此水ニ流鷹
影ウツリテ見ヘ之ヘハ申ケルトこれされ野守ノ鏡と
いわれれよりきそ左方物たれ?なりて?へとな
あるをかし鷹の野もるの鏡トエハつかきれえそのる
ちれハ?や
たつ乱松ハつくもありあすくまよしるるてけむもくるゝ浪の都

彼浦ノ彼松乃本ヘヨセテハ帰リ〳〵スルハ其ヲ恨テノ
心ゟ歟之松ト云恨ヘヤ取ナキヘ云ルト葉ノ秋ヲ
ヨリ恨ある二ヨリテ秋ヲ寄ノ流方ニハこぞもなき物ヲ
恨テノミ寄ル波ぞとなまりへてよせてまかへるなりへこ
葉本ニ逢ぬ事人しれぬ事なしはうへハ口ノ名多るノ
方あそしへ行ノ実テノ見ん程つて

白波ハたちさわけどもうす磯のあらめかんしかるゝ思ふ
思ひ中ニ口香ノ色時ヨ入ル方之作てうわをとらのみる
めハうらんと口吉ニ心をとけもあらんと云なんへこうを
まハこりぬと云事なりヨこり須磨と須テノ浦ニ寄
テあるるまゝて

第十六新之

色よき雪よ多まゝ世る梅乃花鶯のなくやまとにて志れ志ん
白梅ヨハ雪ニ紛ノ花また鶯之鶯ハ梅ニ志るしき物なし
ハ能ワキテ志らんとや此志れ志んハあてつゝまき詞也

能志らんと云事ヨいつれ君よハ志らまし人なりへこ
多ノ紙志思ひもしれ花を梅花モツ得たりぬ世よろへて花多る
此御門ハ世ヲいとせ給テ山ニ隠れ給しへ今時ゟ
ゑとあきれしに流製之意欠梅勝なる花ノ流続ん人ぞなき
思ひやりなき

思ひやるこ月日のゆくをえしらぬ方ハ花の色とふも先ふ〳〵されハこれ
思ひやト八方万葉ニ不知ト云テ思ひとやあせたりされハ
此方ハ思ひと云詞ヲ發云乃歟ニ大未ニ知ぬ方トシテリ
いさよひと常ニ云詞をと〳〵切テ句ヲ隔テヽヨメリ

あるへ花を折なるゝよあゝさきなくみし残雪乃色花色哉
あるへ花を折なるゝよト八りとみし人を又見る也なり
りとこし人乃花なしハ入昔ノ思ひ出られヽト也あるき
おもくハせ人ゝこゝろきけにあるとよハおもり

桜花おわそみしほかりつぬよろしわ志つりれ志る成る

後冷泉院御時御前にて翫新成桜花といふ心をを
のこともつかうまつりけるにと詞書ニアリ新成桜花ハ
作リ花ニ非ス也花ハさなから咲たる様ナレトモちらぬ
ヲ云ンテ造花と知ト也

けふもあらハなれ名れ行春も雲のうへよ散すなる花よかて
月題也其文字心ハ造花ニテモアレ誠ノ花ニテアレ春ノ暮
ルヲモ知ス散事ヲモ知スヲ詠ニアルニトヤ

桜花さそふ春の交よそや風ハ吹せぬよもちらまらん
風ノ吹セヌ世トハ泰平ノ時ヲ云之無端鏡屋長松樹忽
取風声作雨声ノ菅唐ニテ松氏ト云人ヲ起シタル事
ヲ作タル詩之

てる月も雲のよそにや行めくる花そこの世の光なりける
世間ニ光ノアル物ハ月花ノ二ツ也月ハ上界ヲ廻リテ他
ノ世界ヲモ照ス物ナレハ此世ノ物トモ云難シ此下界ニテノ
光ハ花ナラテハ無シト也桜咲ヲハ花ニ比メヨメリ

みよし野の峯の花はしらさ花ゆきとなるらん山の春の花のききを
桜咲春余ラセラルヽ事之春ノ暁雪ヲ峯下ニ見セまいらせた
花と雪ときき申サルハ事ナルへシ峻雪下ハ此僧正ノ御歌ニテよ
しのすまや

世をいとふよしのゝおくのよふこ鳥ふかき心のほとやしるらん
呼子鳥トイへハ我世ヲ厭フ心ヲ能知テ吉野ノ奥深
クよふとハいへる面白事也

おほまあへ春ニ花さすまゝ衰せ小田のかはつの夕暮の声
古今序ニハ鴬蛙ヲ剤メ蛙ヲりろかされとも世間ニ少シ羽
わそのやもおまあられハゆきそうまあハまなあ
とまあ

春の夜のおほろ月代もほのかにて霜よりしけし草のさなきな
春夜ハ萬ノ物ノ潤ト成テ生長ヲ天子ノ遍キ御恵ニ

比メ我身ノ愚ニセメラレタル落葉衣をもちなし給ナト
夕ノ衣象ラスル心ヲヨメリ面白キ哥也
皇乃まもりにけふもあれとも仕ふる身よのまんとそおもふ
皇ヲ守ル未ダヨリ人ヘテ未言キトよめり 仕ふる夜にのまん
トリ思フトハ是程遠キ恩恵ヲ受ナカラ仕ふる身
思ふハ人ノ私アルヤト述懐ノ作ニテ世ヲ不知身ヲ誡
メタル哥ナルヘシ
あかしてもみしる人とも思ふまに暁の月は帰らぬ
月ヲ待出ニ東ノ肌ヨリなかめてあかしみる人そ思ふ
間ニ西峯よりくるり夕ルトノ
秋とてて月をながむる身ともなくゆくゑのやみ我か欲らん
四十ノ闇五十ノ闇トハ云ハ別ナル何ナシ只よりけり人のう
きくもそとき之哥ノ人ハサヤカナル月ヲなかめ又ハ行
生ヨリ人ノ闇をあかしとや

天乃戸をさし明るこの雲居より神代も月も新をはまる
天乃戸をさし明方も月みれはこそいまもそ思ふ
有る山本前ニテ詠しあかしとし明ることトハ天照太
神般若戸ニ籠給ヒシヲ諸ノ神達論集ナトニ給ニそし
明て出させ給ふ事ヲよめり只今明ることの月をこそ月
神乃岩戸を出ましくるやうにみたてまつる
んかまや
明るこ色なれは比袖につすらに月もやとる物そみ
多き袖トハ涙ノ袖ナルヘシ まくらに不見之いかなる明
石ノ月もかも人ハアハレトモみまくや給んされハ月を
頻ニ人ノ袖ニやとる物ニ眠人も人比いはよめれ袖よ新
ハやとる尾しともまくろにてハきまわまと云
んも有ヘシ
なかめともあかしやつらん月路にうら比お逸のつらみ

術道此色とみる説也只心に術ニノ此色ヲ延出ノ
術無具ヲ見ヘテ云誰ぞ行人ト又術人ハ此具ハ求
メテ人帰ルニ三キヲ自他ニ而白京気まとりろヘタルト云事
人

女郎花はなのなにめてみちくよ露のこほれなかりし花
法性寺入道前関白太政大臣女郎花をもておもしろく
詠よし時花は之詞云ニアリ女郎花ノ歳ト云モ只ハ露
ノ物と世ける事ノうつろふ多之女郎花は女の事ニうちく
てよそになるゝ世は我方の事ニつけて早トメなる
云ふトリ
白露は色もとゝし女郎花いかなるやまと花をむすん
此言は露トナルは今ノ言ハ向着大なるさんと露ノミワナリよ
てはなしんしき色ハノ多くのしるものト物かたまふ
人

山さとよくもとむるかきの句まなく秋は秋すゝき
苔むしのわたる松垣のひまさへ見ゆるもれなき
家おもひ傳たる故なりけり
百年は秋の命なるへきわたる人の前の露とそなるらん
百年とは花なる年をいふなりといふ詞也
君が世にあふ坂川の濯まてもかたき人は甚と詠けり
君が為あふ坂の濯まさ人春まつと我
方のことよむなり

十七
雑中
白浪の名残松しも根の宮もとく世まてあふかし山の緑なるらん
朱鳥五年九月紀伊國ニ行幸時とあり此
島宮ハ松の枝よりなかく行かわる若ありへし
松よひもれてゆく世の面あらんとや
今はよりしもしもいくへんなみ塩尾の多くれの空

なき此塩屋ハ播州の名所之故所に住居ていさゝ
かもいとはんと云人とも年来堪忍したる事は
つゐに成べきにハうしろをしりてきん只たへがたき堪忍
あらばくるしからじとや此いつきんハ力なしと云
詞なりて相坂の嵐の風ハさむけれど行衛しらぬ
者そひつゝそぬるやうの夢なりけるかし
旅人ハゆくとも住かみ此所とよるのをハおもハゆるなかん
大武三位皇よ出仕なりときこし召て下納言まで
昇り成松まてに住吉とハつけたまへり又住吉
とハつよし皇とよませ給へり此ゆくハやすくさむ
住吉松ハまつとも知の命しをて君か千年のうけたまふべき
松とも知りしてかとハ住吉の松よれいんと思ふ寸只きか
うゐる世のけしてそ見えまりたく行かれとや
世中をいかにかくもいはふるかけ此煙をみれ知りひとそ

心たらくとハまことの事やとおもわるゝ事をあかる事を
高き事よりひくしと云也又心たらくとハ世よ地たる
心つるハとぞ
風ましていく高き此嫁此声よきしてわかかも気ぬ我思ひ
下位なる人のさ波を高きの煙の風ましなひく禅よみを
なされしわ種々此説ありとし不用只作者の一方
のさ波まて〜
花なりそたつ峯の声を作して哉よんの奥もみえよ山
吉野山へハ入とよ花も志なくて入や又世をいとはん
又山よ入やさるてこそ花なりそて峯の声をさしてそなき
也言心の奥をみよと此山をといへるや
空ひても住はさりしと世成かりよみて奥の秋の夕くれ
世をいとひてつゝる哉此奥まて秋の夕暮よう
きよの中をおもひ出ていとひくる哉之秋の夕暮の思ふ

なしきよハあらぬさ毎よんのなりゆくハ世よ〳〵れま
又うき事のミやとおもひていとひても猶いとはしき
世なりけりといへり

一まちよみなれたるさえても杉の庵よすむ〳〵れる風の音に
山家の風の音の世しさハ一まちなれぬ事なれハ別
てめつらしきとや一まちよ山居に心をさゝしておもしき
さひしさも有くさん物と云也杉をもさゝし
よせてよめり

詠ハとおもひなしても松よみをとられてゆく世ハいまハ
多れもなる事ハあらしとる絶てなれもなし
まるし心あるなやはてまつのをとぞかり松と
云事よよめり松吹さへあえしもしまれて善悪と
てかりハしりしとや又ましてまつ事のなき
をうつりし閑居のさなりのまゝや

今ハとて書よとる人き有れ松ノ庵をハ去るとて行ゆう
住馴し今ハ限と山里よ爪木とる人き〳〵のなん
此歌を思へ哥の心ハ松方のまそても子の是を
是千秋万歳と祝ひと云人よ臣下のゆるへし
我なりし猶よと心よ袖よかくてし春の去の勝
住くしと独りて松風ときけたるゆゑ時毎の心よ
て松風とハ心の袖ノよりて此地猶都よ恋と我
なりしさひしさのあへし
をしおける所しけ山きき今れ松風と杉を
古よりみんなもりつゝやことれひかりまさしれ
みん我庵ハ言れ山中にし此毎をもつて
をしおるとハむつし言れ山の松原をさゝし
よおもへる事のまゝしと今ハことよ松籟の
やうよよとおもへつ世わあられとて猶よ琴をさす

河の北山 とよみやまとうたのさかえ 又あかつきくらそら月の始
後白川院插頭なるよおもひけるよ歌道の
分の使とて事のおこりあふ河の北山御幸
ましまし芹川の一事前ハ光孝天皇行幸
の旅の時の事之事をうけし又あるものとの
歌をしけるを事としてよりの時の詩信濃國
よりの事之せぬ諸國より事ある歌遊春家を始
殿下名よくありよへ川合の使ハ中少将の要
なる人へ[illegible]もあるへし
芹川の名すれそしきさもしるさむ流の名
茂氏の院の人家を使ハよせてまさなへわなれ
くすり給をハ官位の中のあるをとしこそ[illegible]
我世をハ[illegible]

此言語よあつかひして歌よ云ある由日令[illegible]
しそ此歌をと見侍る事をあくこてより殿下[illegible]
不戦場の心之冷よりあるをとハ命の限りのみよあるを
わのころきハあく[illegible]欲く心也我世我事よるよ[illegible]
よあるをよりきハまりありや[illegible]よあり識よ[illegible]也詩
ひハ詩之世我なけく歟と歌といつれをといふ人念
もそ歌の人の限なき事も文述懐の人のなき[illegible]
きあしけり
あとの[illegible]よゆるハ[illegible]やくるまくるめのしるされ[illegible]
ありよ高き[illegible]をとこしてよる言へるハ布の緑之
苗きて天の川原とゆかくなきこゑとあらしけるう
天川河内國之苗きくハ惟喬親王特しあひて業平
の流供よそ特にしたれのこつあるよ苗ん天地海家
よるとあけし古事しとよありしてまた[illegible]

かとハむかしく何事もをくるよしや
高末の枝も花もさかえありし世をわすれせたれ桂
高末の枝とふるき枝なる枝もちや朽て花もさかりと
よるまでりいく世経つ思てるを長といふらいく
世とよみ

さくらあすきる名にハたえせとわたる川ええやくいつか世よて
龍田川ハ潤を見かりや立寺川とまたなりしか世アされ
ハ定なるき名にたつとよみわされたとも多く作りし
をよこそるといふハいとまうしけり因類之と屏風の
絵ありハなくきおくるに之

山里ハ人こそせしとふねとやつのしあとそうらく成ゆく
人こそせしとハ人来させしと云ふね之自然に人の跡絶
る神と云之

よくらなよう人の世ハ流る人花をかし何にましき方成とも

秋をそれてく流れ之作けるよ四角き人代こそすでに侍け
まは紀也よりつかうしける何事人をとそして浅ま
えかりき衣し川のまむ方ハ隠逝の人と云へうくれの
うきと云人をよ新ならすりのなきの所の思ありたえされ
も男人乃とふねをとうなたるんなるてしまつるハむ
さうかと云羽へ昔名川紀野也

ありまれ昔のなりとよ高あきてもてぬ山路の月をとみるさ
終夜乃夕の香河来ハいろくの山路の月代あきてうちま
いろはみらくきと言ありもちろ百首なとくあさ
そふるき神に

春をこつむ山ちの露にぬれまぬりあの月を見て代思ほの袖
雨にきてくそくれたる所申しちのあれといふ恋祥に
かたりせとといとひ見そて山林よましいふに恋も述
懐もいかれハ袖の涙にぬれる事なりし袖のぬを

事のあるハ只晴廷の霞の衰えとぞわきまへしまおも
のひつくる哥也
是れしの人たまとハ山姫のな桜ハ雪にまがひあれども
是ましの人とハ是ほまことしといひし人の此桜ハ雪なり
みりうりと云を落花のごとく常に人のみる哥之さまに
てんなし花の此人をまそまもしと守月日を送り
めてきそ雪此ほまそもさとつれをそしつる哥之
乳やとも霧のこゑけく成者そして弟にやつして脇宮の月
弟のまやつりし只ハ其花まそしこゑ月ハあまりめ弟にかくし
て光まそてみつたるさ夜たりつて
山里にとひくる人此ことくさハ此ことくさハこれうしやまし乳
ことくさハ號にいふ事人口すさにまうしやむハあまて
是矣にまてハ他人なりしとあり哥之誠にうるさき
故事也

斧の柄のくちし昔ハ遠けれとありしにもあらぬ世をもふるかな
晋王質が故事不及酒其斧柄乃朽し事ハ昔の
ことも今もちしたりつあまた成つるハささめしこと
昔にとしと述懐の心にまとめよ
いにしへの事ありとみれハあまりに行きかひある世中にもし
人ある故賤の園生の奥よりきこゆるても世をはなれぬ
しいにしへと述懐の心面白しかつまたなれぬ乳の
よくある世なきハいつくも同しうきことといへり
古畑のそはの立木にゐる鳩の友よふ声のすごき夕くれ
古畑とハ荒たる畑なり さてハとハ此所は荒たる所とい
ひたるとハ後とい心もあれとも是ハ只荒まく哥也
時しかり
つくしにも紫おふる野へハあれとなき名かなしむ人そきこえぬ
紫のへの野とゆへによるとあるたゝひ紫なるとはゆかり

の中へと渡て跡の九州になかされおはしまし付給
ふよしをきゝてむかしへのなきとあはれ見されける御
詠之
身のうき波のゆくゑはあはれなる海士のすみかいかなる所よりや
身はうらうきてつりをもとめ浪路はるかにこきゆくる
されはいかに海なき世之なかさすらひてハなれもしら
き世之とよきくへいそけ
いはんかたなきうき身の中のこゝろの内を思やりいくたひなけかん
成とこのことゝハ身のうきたにこそおもひ事なれや
つの中にゆりやいくたひかなしまんとハ身の行末の定か
たきを歎く哉之
ちとせをへてもうらやましく浪ハ花の色も残る身にそへん
後によりても冷泉院の後裔の流顔をも見奉りて
かゝる我ハ出家の時にのそみ奉りしかとも初書にあり

これのことハ昔之すかたなしとハ貌にて女房の装束
の時髪おけとてあまたのたまきよすの糸をもちて
をかた出家の時之しゆくせとてもよくみゆる
言之昔のすかたにて我身して衣のいと糸
すまたのちんとや衣裏宝珠とのたまふ法華の文之
流きりしをはね光の男も陰されなくておそろしきに流れなさ
御ぬきは光とハ光のつきせぬ光をと云人之光とハ朱三条
院にそおほせし時の光之まきれなくとハ思もなく
是なりてと云御なり巻てられとも巻て文の御所
ろくゆるとやられとみよハあひてと云事秀句
なれハこゝしをせそ餘情あそくよそおもへり
ちらん衣のすかた哀る海のうち海の中ちん
上東門院出家の後こそその装束しつる沈の
むくの箱に入て梅の枝まつりけて奉りける詞書

そこハ衣裏宝珠の心也出家の後なれハさこそあるらん
衣の玉とかけりしそのむかしやそのかりのむかしなり
なされつゝ後ハ歎息の後なるへし
涙し
雨ふらん衣の玉にみたれつゝなみたなる露ひちこそまされ
ま(か)らんとはおのか身の後やうらのむかし海人ありとなる
此ハその羽にあつまりてこの衣の玉にみたれつゝ只
玉のこぼれのやうに我涙の乱るゝと也されハ粒ま
たさかる浮世の憂の中ハ思ひしあまりあき人
塩のうらに思ひのこしく乱れてあれか身をは我身のいつ
いつかしもれしとハ身の世人ともなく浮事もさなり
ひたきとりや塩の煙とハ塩の千浮の間にあるへし
こ塩のまに貝ハさてあらく色かなれともなかの身もいふ
うらハたへなるともありし海人のかり
我より雲のやへたつ奥山のよりの水ハさみしかるらん

かね高光横川にのぼりてしかある人のもとへなきつかは
世語にてかへりし来る詞書之第一の句より第四の句へ
うつりたる詞之我よりも横川ハ住よからんと云
しくしやわらかる心なるへし
百敷のうちのこゝろのおこりしくそ雲のいさたつ山ハ住よし
捨身の人の心に我をも常にさしくなさとハ本意に
あらさるやうなる事なれとも和言なれはかくよみ
るなる
詠も我よりも住よきとなきとつきさと心をとる
なれて常に乱しく横川ハ住うしと詠の誠に
あはれなく君に対しまうてハ礼儀正しきなる
かくのことくの事能く見侍るき事所要之
憂きをもおのか身うき世とハさらにつかれなん狂言綺語
世のうきむきにて小野と云所に住侍る葉年の頃の雲
にとたのみありつきたるこそうきみてありてきこそ

萎しとそれよふよかきやとよふに侍けるを羽林にあり
業平入道忠道公へ心ハ能きこしたり忠道世
をしらえとりと思食たるを御一人あつれ候
し
あまつ風ふけゐの浦にすむ鶴のなとか雲井にかへらさるへき
夜上人の列を侍そしまぬ侍ける詞書云吹飯浦和泉国
名所之夜上人なれてとハ六位にそ殿上に侍て五位に
成て地下なりし事やなとか雲のまよへらさるへき
とハ又奉公をも事ハあらしとおもひ侍へく
勝津をよ人のゆをとるるとハむかしによそもへ侍る
上東門院高陽院におかしまかりけるに行幸
給て侍たる勝を侍侍して音許由か頼川
の耳をあらひし哭人の心ハ清きもし此勝を
見入て侍かしも御承事ハ用しんとあれり

たり
命さへあるハ見つへき身のはてをしのはん人のなきそかなしき
此うたハたゝよと云詞せ見つへきとハ我身のはてをあ
はれとしのはん人をも承命たゝにあらハ見んとせさりける
生たかのれむ人のなれハ悲しきとよめり
世中のうれゆくすゑにかゝる我身のうきをもしらぬそ哀なる
世中の晴行雲とハ明王聖主の御代と云我身の拙き
くてさしよとき形なきをと卑下の言之
身のみうし我か苦に先りよりつゝ人名もしらぬ
身こそ苦みに埋もれなりしとくるすのあるに
われへきよ世智なる身の名をもよ朽えそん
と卑下の言之
くわうし我身此とつとのともしれハ君もなき世よりくる哉
此言法無題よ五十余年星を廻と云事也文訛

偕あるに別る厳急ようしつ君おかしまさねに移り
き世とのかれましてはかまみ返路不知とあれハ慎
えくくし
教なきぬ身すもんのりちつ知ようかれて父の人のまるまるの
教すもあるぬ身をきる心ぬ扨くる ねと知れて行
術なくうれ出ては父をれとく立悔るよしや
とうなるんのちくすに海の色をもさてさしいよつみれるの
愚痴なするんのまるハおこる是ぞ思なするんのますそてつる
のふるのさそといへるきんとやくうきまわ奥に入ぬ
あすく梅すや
そむきても行うきねハ世なりなわ身をとえれまなるのなる
背
ぬそを行出れし世ハうき物まそきりわ身をとえれまなるハ
心すそなされハ山のく住てしんハ行人間にまいそてき
事をとふとや身に教まぬ訓をにくみて去

ふみをとゞむるいなくへし
ひさつくまさすしこともなけきまんへけるしき哉 夕暮の空
有磯の身ちぎりなりしをつくまさしもしてもしるぬ
何まに欺くへきとやそれちぎり夕暮の空を身を泣く
そのまゝにそわたるをうけるしき人の身まされて
むかしく秋月をもらし事をいはすも
袖まとかく露とハ露と忘れんもなかれわ身をおもはん
袖まとかく露とハ涙や後を露ちぎりひて人まおもへとも
円ハ秋毎まなかれて我おもんの色をしらんとや面懐
乃まへ
君の代まあつ守ハ行とされ絶れなくとまそハおもはれ身を
ことをむかるまよりけてあつ守ハ行とされ
とまへ君の代まあつ守ハ行ち合まへもきとね
ふきを君の代まあり人なのきえとへ意の方まとり

てくあり

大くしの秋の稲さしの出雲風君をとれ行る方をこゝみとて
かくてこゝおきてくるふる万代ハ汁えあらん我道の
たのしみを年ごとにしてあり君をとれ行る方よ
心よとてハ名のくもりて巨細よなすりこゝろ哉
和るのしやおきろ君をあひよろひせるあれ我方武士たる
うたろ源のおきろ堀あひよろふあなの消ぬ抱ろ
またきもろし我和るの名よたらさんとし堀会
あのとくいまるうきてらん悦りされハあの家
方のよく君ろせよと早下しなるこ
立て山とちるし日月も秋風よ去り秋よ露これつ
ち山と染るぬとハ涙雨いつくるもちきるぬとや御光
月も秋風もおくきてまあとまてもむろやなれハ
感情よろくも浅の露こなのしく

君か代よあへぶハわれ名やあれと方をまえたのを次行末の究
没てハこの鶴乃達者之されハ君か代よあへ家名ハあれもく
作りさわなのろ行末ハ君ろぬとよあり又子孫の事
まそもなるへし
うきしつむこん世ハさそもいつまそとゆまよひてもたへ行ね
一心よ対してまた世乃事をなけくさ為へ家の事を
そこらくゑぬるとなりんハけくへおろぬ和なれ也
家なのろんの君そをあろぬるまそ道遠ぬ世の方の文ひとしき
此るも人乃職情の実よろ事なれ殺よ君の事も
定らぬとやされハその終をあろぬとや
とくてあとこゝみハそろしなすよあろ次のかまて世絶え絶ん
中し世難の事あはれをもしあろぬ人の心よたのろやと
家方のうきよたへゑてよあり
あてやろぬ家方そつゝきさりとをと思よんのよ名残ませて

さりとはと思ふにひかれてうき世をわするゝなり
作者不知とや
うきなからあまたある世にかゝる皇后の姿をとうては涙
あれは何る世ともことごとくりて古への姿をとうてよき事し
昔ても見てしるきなりの御世中にありて古今の
みしをみきなりし善なりし代を思ひやりても涙
こほるゝとや
さわかしとかのむかしの行末を思ひ入れてあらぬ世に涙をもよほさん
あむ行末の定不定といふことも只世にまかせて
あらんとや
うきなかすこし万葉をうつすまゝにうつむなとかくこそも山家
よつてはる為に源家失ひ代にもうき世のつらし
けるあくまてに存そて作者羽衣や山門にはすみて万葉の
なかるれはよまへてうきなかすこしみんと云て来

に山門のあとを守りまうてゝもや山門とは世俗休
しけるにや身こそたりもしと万葉を
みよとや
されなりし涙そめかゝるこそ契りてけんかことく
身の庭叶給ふて社乃まもりひのもとこそうれしくて
給ふるに蓑といふてもかゝるかゝるは蓑の事也昔
にはに契りてけむなきとや神恵納受の事
にや述懐や
あるしくはあれなりにすもしへ思出の在けるはさても在る名残
二句まて切てうるまへ思ひもる事になしきても昔は
思ひかゝりしあらへくはあらもる事のあれしとや
あ事なるし成人のあらんあつけるうちに月そさやけき
は古説に多し中道実安相乃にあとしるとす作れとも
秋夜乃影にある猶の観へなとしし定りたき月み

しんちうにねもそうしたれとよめることくに見我
みちは八月のさかやなれはねのおもひとおもと向きて
なくさむる友のあるなんとよろこひかはあれは
うりおきそ我か言くみる之
みちのくのいつそ君みは来なる名残おしまつくしてよつかのいしふみ
慈円僧正又そてハ君か名を此事も尸然しくきそし
尸つかして伝ふる迦しまと詞云ふにあり坪石文下ハ
菖田村に單陸奥乃坪と云所のいしに田華の中央と
石に碑乃文を書しぬ坪乃石文と云やう乃心ハ
あく文に云ふ事をつくしおくへとや
なすとやくつにまなる第に成なるよそれにもあるふ我方統
ねとこやと八尾おあれしてあまりたる心やえつにまて
第八以まて第し以前まてと云ふ八多友八あらしと云
詞や我方もいつまてそえつしくハあらしとなけき給

たる御示之
うきなるろうくれ世をあるによろしかれやみけし住吉の松
住吉の神とよむ名紀をみつしくと云詞に合て松とよ
めりる文なのを見つけて年ふるかた我住吉の松にけし
て神慮りもあるれやみけむかんとよめるにや見え
春日山名の峰の松やともおもふまつけこ世原乃あたりに世
春日山名の峯まとハ彼所卜義家ある所ハ春日山と
ありし名の峯まとハかれむすれるを云ふへく松え
つると思ふに神慮のいつそ恵而まそおる世尸さらや
と行いふを思ふまつけこ世家乃松風とはよるの述懐
のいつなのやし
衣手の山井の水に氷るこし根元こそ見て見しき
照時家の歌ハそのかとすまよ仍けるとあるに四
位して後家の日つかしける詞云之衣手の山井

のちとは臨時祭とて石清水の祭とは春を経るく
をと云也此祭を南祭と云也霜月賀茂の祭とせ
られしをは加茂の臨時祭と云ほと舞人あり
その舞人の装束をは小忌衣と云也其小忌は白布
に藍にて絵をかくや其れは衣ものの山井とあり
山井か井とよむ（き）絵の文字を略したり
紀みえしとあるはかの汲井のいもあめて青
の文字を略しけるやうなれとは当の事也
それを神によせへてよめり

いにしへの山井の衣なかりせは忘るゝ草と成やしなまし

右此意かなれはかくいわかはよくきこえたり
多ちなつかしきてたよみけると衣おもぬ昔の事をこゝに
後冷泉院御時大嘗会に日かけのかつらとして実基
朝臣のりとよませすとてかん帝の御時か出てよく
ていひつかりける羽書に小忌衣きたる人は日蔭の糸
を冠にさしてる日かけのかつらを引かけし冠の
にかゝりしを忘れかたきことゝ云え

末枯の風にゆきちて人忘れぬつきあ世を我見つるにかゝら
ゆきちてとは揺るゝ也のたゆみよくなりしをたえへく
あかつきとは葉末とは只夏末をそふに末枯和歌など云羽
あわれ秋の人忘れぬをとは去意なと流もあしきん
の内に揺るゝを云事也

風吹みて此和葉の日にさらへてゆらく成行く秋後の秋
源氏薄巻に云るは吹風にうけてたゝよ末枯よわけ
よりかに流後はましてそりあへ揺はすとおわ
その人は我此和葉の日によそへて風にもろく成
行よく我後もうき事のまさりて身をしと
也

うつし秋の萩ちる風におどろけとなりの花落ちさそふる
なりの花落ちハまましの名なるべし
竹乃葉に風吹かよふ夕暮れ物乃あはれハ秋ぞまされし
竹の葉にとよくときけ高秋にうきつゝ涼しく
覚へてあはれなるとや

位山路をたどりてのぼれぬし身をおもふ名に住居より如家
位山とハ官位の昇るを山によそへてよめり路をたどる
てとハ父祖乃跡よりつゞく寸のわるを云之されバ官の子
孫のいくぼくかきまゝよる乃を修ましよとよめり
竹の身のいとはしわざる身乃程をおもへハ昇乃心にも我れ
述懐の意へきくよめることもくるしき家よりてあ
るハ口ハ菱の山しとよめり

竹の身乃かよむそうくと根なしと思ふき名もしく世ハ人
まうくとハ蛛乃家を作るそとうくすれ縁之おもしとくハ

是とくに我も家にまさいハ用しとしせしあれとし蛛乃家
なとよまれしくハおもしてむかし全き家なかりしもいくせ
とくんまうんとおのきくもきき事とおもひつけて
よめりまうきされハ余と云字のよく
ひそかまつ枝よりまよふ露の気をしそれねとや葉にかゝれ
此等疑不和とあり定て独なりんなとまつとハ葉にかゝれ
花之枝とハ花を捨枝なるべし学むの事りやつるとハ
其時をまつ命や学花になりん時気をとも消え
ぬるとよ露の命消えて頼むともせりしあはとの
とちる事を述懐して春の花ればきと
いひけり

小さき松風まつ露の消やすくてこれ一時しとおもひおくべ
為よすりに覚へく待ける時家名良中将任の
事申しとて民アロ花光のもとにまつかりしける詞

本之風ハ無常の風や露ハ命之節とハいへる所かと続
宗乃夕をおもふわれ見之されハ命乃終やらぬ間ニ子の
將種乃事をおもふとや將種ハかわれより中ねたり
將ある事なりけり

昔を今ハ此ん何くにさまよひけらんといとゝあはれき
今ハとハ君なきハやかしまの名残まて今を限りの
やうよみよふしく覚ゆるとや

一ころまさるとわたるんまは住さむかりし方残りまません
一ころまさりたる家にまて跡今我方のまさ彼の
心もけハぬや之あまりよろしくいと忍れて秘る
方なれきさて行ともこんと俺する心へ何ハ寿やも
方ハ浮世のましろひをおそいそぬ事をよみける
云へ

行ゆるきこ凡世残るくいへのさとへ九くへ々やさしく答へん

此世と云詞まて後世ハあらハれたりやよくきこへん
とハ後乃世乃事をのうきなまよ此世残かくいふとゝ
こゝへんとや

あふみつきこの後乃世ハまつなれかなけれハこそハ此世まハまわ
我後世ハまつなきころと上句まて四てなけれハこそ
いと答たりそれハ問答の妙やなまめかしいとゝいと識よ
なきとのよしあらしを達晴乃人乃後世の事をハ
ゐてそ此世乃事まハりかるらをあまり乃事ま
ひたるん之文段ニハ値まゐりての世なれかんおよ後
世もよろしきとく

世残いふ名をとらまよさがあつきて数ならぬ方にも負さん
さハとりけるはと云詞や妙文乃かしらわ世まよきまし
あらさるまいふと云名をもうけて世まよみしわまし
て人の出まさんと我方をとりく早下しけるんや

身のうきをおもひしてや居をなほしれむくなりひめなき
をむくなりけるひ乃なき世なりしハ身をうしとひとしも
世のひとひとをむくと云事ハあまりにかれ身をう
しとひともおもひハあれれと
いつまでうき世にあるべきと我もまたあなうの世やと何よへ
いつまでうきとハ何ところまでうきや我身世にあるまじきれハ捨
つき世なし捨べき世なりけるもかハりうち世之と守て
後とさんやうなしされともされハ何ところとよもう
何事にとまる所あるといへハ清らかなりし又世にをいてき
まとわり何事にも一としてものとまらぬ世ならず
よ文いとしきとおもふらんとまる事にあらずよ
うらひたる哉や
昔よりうれしきうきハうき世邪歌のよ云の中なる
ることハ年ことに人と我と同じよ云やうなることを云之

世と我との中さえやうしくハなきねなれと其れまこと
きとらつわ
うき身にハ山田のをしこそ世我なれまこと假也
数なるぬうき身なれハ世我うらむる事を云こそ
うらひなしされハうしこそひさしまうまじきを
山田とうよわひさと云別をとより
清あるし昔の作をなしまもれてなるるままうき世まし
なりし人まうきままのまま字之なりしへうきへいとまなし
なとれ三郎代字なりて

神祇三

雨やさむき衣やうすきおのれからこゝろのうちあればまよりきときと
こゝろとハ社壇の棟よおちたるてさればこゝろなしたる
さまの名をうつあれの方とハ二をおもちかへたる間威
るべし　社ハ破壊を法門へ申させ給へる法弁と云
申侍りける住吉の法弁なりわとたゞ住まる

我身のむかへいたつてまなしくそハ又雲をかけてのぼるゝくりを

賀茂の法弁なり雲をかけてのぼりけんとハ本来く
みくりかへんとらふ弁なり

玉依姫　　三銚狸草

見へける日本の名所なりてぞ秋津洲とハいふハ志らける
天の岩戸ハ天よりくだりし其の名をさかん
けるとぞいへ

杉政友

神垣やみしまれ川の下かたよ祭し山をみまをなつよな
夜神とよ云ハ伊勢大明神と申まいらせ候ひる事を読た
まひたなり

そと天皇

なかあすや神ちらの山よ雲晴て夕の光をらそん月影
遊の湯て夜の子乃夕よ刈りて月影なきらそよ
詠まれやとよめり神路山の法弁は似合つり神路
山ハ太神宮の法山なりわ雲清てとハ和光の力より世
上闇迷の雲晴国を静謐成つき事を天照太神
へ祈り申させ給ふ法弁成るべし

同

神風や豊みそくしよなびく四よ住てあまくとらそれ
神風とハ伊勢よかぎりてらふ事之風也いづく
とも清ぬ如く神道の有ま[illegible]き事を社会を

讀ア悲ハ大之只たゞおひなるとと云統之ミてくるハ神
よまる神ね正而也さてハ幣乃さてへ清浄乃ね
なるへしかしわしとハ云ろしけなりしと思たる趣也

西行法師

宮柱志たつ岩根よ志き立て露しくもらぬ日乃ミかけ哉

下津岩根とハ三代沙子此下界へ降臨なりて鎮座
ある事乃曇国なる事へ宮柱ハ宮処乃事ま
なや中臣祓よ下津岩根よ宮柱太く立とあり
底をなる神や露もくもりぬ日の御影と云ハ今
乃世まで和光乃くもらぬ事成るへて

慈円

やはらくる光よあまる影なれや五十鈴かハの秋の夜の月

是神宮の御威光乃世まよはるゝる事を月
よよそへて光よ徳ある影となへり

中院入道右大臣

立かへり又もみまくのほしきかなみもすそ川のきよき流

なヽ勅使として参りたる折からいちしのもまやそよまに伶
あまる羽事之云ま不審なし一師乃もまやまそと
ハ一師御伶勢乃名所之もまやとハ羅路之前ハ勅使
乃過る時ハ水羅飯羅とて官人乃五里ある所
を行くハ馬よあらを乞ひ人よ饗良ニ泡して
通し事り此一師よもむまやあるや

よきへ云えし

千はやふる香椎乃宮のあや杉ハ神のみそきに立る成けり

香椎ハ筑前之八幡として女坂や杉や杉と云ハ
弘くしき葉の云なひてりくみと紋乃如る木よ
云紀とハ神符を作る木之杉ハ束なる云れなれ
神よよそへて云ふわ御衣木也となり

君を祈る心の色を人とはゞたゞすの神のあけの玉垣　慈鎮

人のまことゝ云也 丹誠と云也 丹心之心は臙は色赤し
されば神のむ垣乃色しるくて今とは
なる人をと(?)はれて真実丹心をたゞしく顕はし
むねとは是なる顕之故朱の色も言なれはかくいへり

おほ田にかるかゞみのかみよりせきとめて　賀茂季平

秋月ともきこえて河の上に神の
御よりある云書へ大田ハ神田之ことなりける
賀茂ハ貴ハ賀茂末秋そまします秋月とも
まうるといへり

石川やせみの小河のきよければ月もながれをたづねてぞすむ　鴨長明

ともには賀茂と書下しを賀茂と書て石
川やせみの小河と云瀬見秘深といへり
石川とは事天川の別名今瀬見と云
たゞ神詠にある石川天
河なれは月をながれ君て見よとはせ
雲の上ゆく七夕なりといへり此河の近所
や

春日野のおどろの道の埋水すゑだに神のしるしあらはせ　俊成

おどろの道とは棘路と書て公卿乃唐名なり
いまとはわが身の下官にて世にうもれ居る故
末をかしこの下の埋水と読て末々子孫
までもあれと神にいのるとや

慈鎮

やはらくる影ハ中々ありけるなれ紀毛とゟの光ハ三光にかゝやき

日吉ハ社よなりける所ハ中に三社をとあり
尾張なるらけハ語ハ也本の光ハ本地の光の明来
也日吉の二宮ハ本地薬師にてあり段をな
りと又根本中堂乃本尊も薬師如来なれ
ハ本乃光ハ家よまずかとりと読給ゆり

同

あら根ハむ七乃社乃ねよたうすきけても七乃道ゑ人き
七乃社ハ山王七社乃御事之ゆゑ多まも紀とハ見る
まそ人ミたる神人乃くる多まも紀のやうなる
ならかりぬ乃ミちよつまれとハ傳心させ給へな
と神慮をあらつ事之

同

ましなへて日よし乃影ハ今ねむ迷ひなやせ事はゆるなる

日吉乃和光の影ハ今の人をもれ迷暗をはらし
給ふ科生方便なれバよくその今のかるを
とらかれ滋の迷ひをたくしき時乃人なと述懐し
給ひわかわかるにはまなすらよましく流れた
る日の限よあられは只此所かと思ふ庵之

同

諸人乃神乃ひかりをうそるる此涼風に心もさかき春光の哉
神乃ひかりをきたらとハ雨乳雨乳露をすりんかなる心
くを夜風と思ふなり心もさかき春光の意と読
つきとはまた大津ハ葉津にてこれぞかりて心の事を読
とハいつまでかへらうなり

白川院御製

さくらは花の香しき絞みるらくに神の乃氏をもる
さきぬ花とあかつはなの香乃人ゐ満ぬらむ

神ゝ乃大慈大悲よりこそてあられけれ
なる所寺へ詣け路へまうで侍ける時左
ことのの成なりける我侍りてよめ

左京大夫顕輔

としふともこしの白山忘れすハ雪をあはれとも見よ
加賀守にて侍ける時白山にまうでたりけるを我
思ひ出て日吉の客人の宮にて侍けるに釣
中へ此国より年老て参りけれハ又しらの雪
我所ハれと神も見る夜へとも客人の宮ハ白山
権現にてましますゆへそれハこしの白山わ
よまれたるを読わ

貫之

ちはやふる神のよおりたへわきも衣いろくちはせる七日ひさ乃人
ちはやふと云ハ神に懸る多く百首合に判か絶
見しなりちはやふるとハ川の名まりつへる所を
云へ所中なとうけてあまりし七日ひぬとさらて須
七日とをつくよハあまりの数日ひぬといふかゝる下
川やしろ神のよおりたへくるとうたハあはれき
ゝなるわ

釋教歌

比叡山中堂建立の時（叡）

傳教大師

阿耨多羅三藐三菩提の佛とハ无上正遍智とも（佛達吾立杣に冥加あらせ給へ）

佛のよもなくえわもなくしくしく此智恵
乃生くまれたる事ハ佛のくちの縁とんね
へきこ　〇みたけの言ハいたくもあまりて讀る

日蓮上人

本覚は菩提(若)の月のあけき　す波の夜のうち　ねむしな
本覚とハ物の始もなくいはく開なる事なる
為し又さとりけきとあるハ何(句)ひいかひろきねて所
と開なるさ渡ふさるる寺也渡の為ハ渡なるへし

天王寺亀井の水をよ汲して

上東門院

よみわなき亀井の水をむすひあけて心にちりをすゝき
人ハ六塵といふ事あり眼耳鼻舌身意の六根
に色声香味触法の六塵を具足せり衆生
此塵にくらはされて六道に輪廻するや説

よ此亀井の水むすひて心のちりはれるきは法と
すゝり法華経の二十八品の哥よみ給ふてまいらせ
御りけるに提婆品の心を

法成寺入道前攝政太政大臣

わたつみの底よりきたる龍もなくて此世なからに身をされきたハ
此品の心ハ此経にあひたてまつりてたちまち佛
になる道をしらんとせり　提婆達多といふ人五逆
罪の人也然とも此品の力にて天王如来と成佛
成ぬ又こ乃所ハ心ハ八歳龍女文殊の教化にて即
身成佛し女身を變して男子と成し
事をよ此方なるきに身をれきのむかひと續見

紬持品の心を　大納言齋信

数ならぬ命ハなにかおしからん法をとくへきかきりありとも
此品の心ハ五百羅漢の衆も佛の滅度

の後悪世の中にして此経を自らくとらんとて十
信那由他菩薩をえらしめて忍辱の鎧甲をき
てえりの事ありともこれをしのびて此経をとらん
とうけたまはりちかひ給ふそれを教なる如今は行
くおしうらんと護り法とし事をおぼふは
とは佛法乃事をおしふと云心
五月ばかり雲林院の菩提講にまうでて詠侍ける
肥後
紫の雲の林を見わたせは法にあふちの花さきにけり
是は雲林院なれは法にあふちと此分の花残
読なせり
蓮誉
頼めくる人は闇にもまよはしやけや世にしけ
其如にて迷中乃衣生度しるしまは
随縁者如とて菩薩は衆生にしたがひて化度し
給ふ事を見えしやまとやまとひてとはる也
同
二佛法の義は随縁度生の心は又お礼のにさ
二く法をきく此日露にみえとききてはうて後にと悪見はなれ
是は師匠に随て仮字ならずもせん事をなし
事つかうまつるは随ての道は事にあらねはとし
学者をも教戒するゆへそれを見人は比とをも八羽の
事へ風乃音を又いと残つとむるこしもよ気時
次
同
極楽へまよはぬ我をいつうすひつし此あけさえ見をしきし
此宗は浄土宗乃他力の中乱にも寄して往生極
楽をなるいには自力乃観念を厭しては
心戒律乃五乃ほしきを極る成るへしとなり

まゝ我人の身のうへとおもひしらるゝ今にして飲ん変
定せんと云ふまて筆の力をかゆるしたしまゝ
乳とは読経の筆のおとしらす事は鞦轢まとめ
かるひとつのひかれゆくて死羽くちの流くれん
入れなれ多く〳〵歩みに近死地也しらすそなり人の命
毎の佇まふおもれ多くし
観心如月帰着生涯霧中乃人哉
拾得に云歌
我人作陽やられ秋霧の身の上もめる秋霧と月
照行は経文と云事一首云ふれんは煩悩とは菩提本
人や佛なりき煩悩なれは煩悩の中より菩提
然は佛への道と云や煩悩とは煩悩也云也
家の百首歌のとむるは可十界れん哉るとかけ
るまゝ縁覚のとなる

摂政家

其山さひしきうき世は法のおしへにまかせ風もなかれ
縁覚と云は佛のとくくして三十二相を具足せ
まて飛花落葉をみて世の中をむなしき事
とさとる人これは独覚世にはさとりを縁覚
声聞縁覚の二道阿らし小乗也是の結句
人は　十界は　地獄　餓鬼　畜生
修羅　人界　天界　声聞　縁覚
菩薩　佛界　是十界也
小乗法
色のある法しん哉は捨し事を哉も私しそくける法の心をしさ
色界色空の文の句ゆとるにまよはされたる哉
同し　摂政太政大臣家百首の内に十楽の心を
念仏の行は聖衆来迎楽

寂蓮法師

紫の雲ちにさそふ琴の音にうき世をはらふ峯の松風

極楽に往生するには聖衆来迎音楽にさそはれ九品の紫雲にのりて行事也雲ちにさそふ琴の音也琴の調を松風にたとへたる也うき世をはらふ峯の松風とは穢土苦域の界をはなれたるといへるなり

蓮華初開楽　同

これやこのうき世のほかの春ならん花のとほそのあけほのゝ空

下品下生の往生人は蓮花来迎して極楽八功徳池に十二大劫を経て花ひらくと説経にあれは浮世の外の春とはいふ

快楽不退楽　同

春秋にかきらぬ花にをく露はをくれさきたつ恨やはある

經云快楽無極長与道隣合明永抜生死根本と云説極楽の春秋の花のなき事也春秋にかきらぬ花とをくれさきたつ恨なきなり

引接結縁楽　同

立かへりくるしき海にをく網もふかきえにこそこゝろひくらめ

又云安楽国清浄常轉無垢輪一念及一時利益一切群生と云は極楽に往生して又立かへり衆生を利益すへしと讃る也　法苑經

其八品をつゞきて作る事ハ方便品に唯有一乗法
の心を　無二亦無三
いつくまても我のりならぬ法やあると見ぬく風にはらひぬ
此品乃心ハ先序品の時よりはしめて一乗をとく
あらはして法花経をとき給ふなり　唯有乗法
のみは行きとしいけるものことごとく佛種となり
有情非情草木国土いつれも成佛を法とあらはし
化城喩品
同　化作大城郭
さまよふうき世の中に出てやすらふかたもなしあはれ
化城喩品とはかりに化作大城郭と云心なり
多くの旅人をつれてゆくに旅人のつかれ
を知て五百由旬さきに化城の山河の中に
かりの郭をあらはしてやすめけり

あなたとはからせる旅の旅人悦てつかれをはらす
所謂此導師又たすけの郭へ今二百五十由
旬をさてさぐりてといひ給ふ旅人の
城にいたりけり今ハ二百由旬の中を行て實の
死をいとはせて經讀果を説せ給ふ
無邊寶大事の法花経をとき給ふ成
佛を説せさせ給ふ此道を一人のこらず
たのしませる道を宿ハかりと讀り
是まことの文字ハあるまじきりの郭なり
とそのあまをとらんや
分別功徳品　或住不退地
同
まことの山に入る法の花なれは
かりの宿はあらぬ人のみちなき

不退地に住するとは此法華経の如来寿量品
の功徳を聞て甚功徳によりて無生即佛
の位に住して无住を云事なきを不退地と
云之を信をも清れ名なりしてつゐぬ宿に行人
そなきとよめるなり

普門品　心念不空過　同

よしなくてむなしき名と成しに後悔き過は紫の
雲と念して名過されたといわされは我雲
名なくてもむなしき名とならしまとなり念の
功徳の花されぬ也若後果の紫雲のを迎ると
水法常不滅といふ心成

景徳院

よしなくてうきこ身はさこそ成るらこ甚ちひる堤の花のには

此題阿含経の文によくんは世の常ならぬ事をよみ
るあらはなり

先照高山　定家

朝日さす光はつきはあまねくも先高き峯に照すなる

華厳経に　先照高山　次照幽谷　次照平地
次照幽谷とありさとりをこうるの恩をもひくに
あきらかになる事をいへり

定家に百首よみ侍りける内五智の心成

妙観察智　入道前関白太政大臣

心清く心に乃戒は静まりはいてさとりに成るまそでさん
五智とは五欲をさとり如れは五智の如来ぞなる
といふ人に五勝あり此五勝をさとるを五
欲と云又五善ともなまり此根本をさとるを五
智の如来と云之妙観察智といふは五を観

てなる智恵をさとれハくれなゐをまかへすけく
悟乃蓮ハひらくしとや
勸持品　正三位経家
さしもそていくもあやしいさやさハ法の為に命と供
法のためとかりをよくたもちなる可し命をもをしまん
とりにゐるへきなしとそもなりしくてハ恒なく世
なりとそかり
法師品　加刀杖瓦石　念佛故應忍乃こころを
寂蓮法師
此のきみの宮ろの為よく善をねハうき世とおもひの思ひよ盛る
題乃文乃んハ末世よ此法花経をとりんよ読の功
人弥ミよくミて刀杖瓦石をも加て此法師
とききりあくをも佛乃為よいそて佛の教のま
まゝく法ときれハいつとなしむまたなく嬉しき

而しと不輕菩薩乃門経へなみ之宮ら河
為よ善をねハうき世とおもひの思ひよまよくへ読り
つゝまゝハ濁世のんのゆるへきをとや
五百弟子品　内秘菩薩行乃意成
慈円
いつしへ此麻鴻沢へ入いなりしもんの此月ハをむろころ
富樓那尊者よ佛乃下可志経て内ハ菩
薩乃行を秘して外よハ此声聞も顕もと
宜ろをかくありいつも乃庵なく野邊の
居とハ麻野花そて始て佛阿含経をとき経へ
るよ小乗乃空理を悟く声聞と成し之法
花経よてみまハ内秘菩薩行よそとい付も大
乘智明乃月ハまたけるを讀り
をを動て法文百首許詠得けるよし

二宗但覚　　智如蛍火
半化法師

道の人乃蛍火となりとおもふへしそれより光出る夕暮の光
此文は為の絶と云事多しつなる寸ハ二宗とハ
頓漸縁覚也二宗ハ何ぞ小宗也諸法は空ときり
悟也覚を説覚と云也此智恵ハ大ハ宗よりふ
遠ハ暗の如く蛍火あらへして道を行か如しとも

菩薩清涼月　　遊於畢竟空

同

雲なれても形しき光は何なりうら紀世中をおくる明
此文乃心ハ菩薩乃悟を晴るる月にたとへ衣を
くもらしむるるそれ業識よりそれ隔てゐる
を畢竟空にあらすと説たる也

梅檀香風　　悦可衆心

同

吹風にさ花たちおちれや白あらん昔あり[illegible]のかの庭ぞす
是ハ法花経をとき給ふ人とそ二六乃瑞相のあり
しに衣裓瑞とて諸乃人天竜高まても仰ぎ見
き頭よりふ足りともしも頭に悦乃心乃何りしを
衣裓瑞と云也むかしおもひけるとハ昔にあらふ
まことある人の心成名し

作是教已復至於他国

同

山やまいのさきまでみよりかしまて置て秋たつの雲の花乃露
是ハ法華経寿量品也文之心ハ医者のよし
かなしき乃子は持たるに此子た歓乃よんぬさまとも
毒薬を食て病に依るを歓他所より帰来
てみんくのさき薬を調合しそれ子にわたし[illegible]

毒氣ふかくいりて狂子敵乃ごとし へつまじもきこゝす
菜をしろすみなりき時歡菜をは子に謂て汝
我方ハ他國へ行て子のもとへ使をつかハして斯
父ハ死たりとつげさするに其子力をおとして
のみし菜をのミて病いゆるがごとく佛の
在世に法を聞て悟をひらく人ハ煩惱乃毒をけ
さきなり佛乃說法を信せずして佛
入滅乃後殊にさきにはゞ經文を聞て悟をひら
きも煩惱乃毒氣ふかく入て雜て迷ふもの也
と悲しみて山田のきしまで寺まゐりとハよあり聞
ハ煩惱乃やまひもまだりこゝハ他国へ行たるなり
まなこの露けさしとハ他国より使をつかハし
て死たりとつぐるに法の子ともの於
めるなり

此月已過　令下昂喪滅　同

みな已以今しもとたどりつくへあひれ後の好れるべき
謂乃文的乃經にもまじえハ文乃句面をある
るをくみとかまたハやくてまじまくゆるせて家令下も
つまるゆへあるれき入胸乃ふくれ行し世

悲鳴啾唧　痛戀本群　素覚法師

草のうき物思ひ小歌をたちもてなまじとをせる廃れなさけなる
そしも悲いつまゝの經文ともしるいかるならハあるなり

棄恩入無為　真實報恩者　寂然法師

ときれたらいつまで世にあらんあひてわかれむ

此歌ハ出家する時乃文ニ在我をいむき生死をはん
なれて悟をひらき道(通)をもとめて去云の事
とかく私て元世の人々にあらはしけまと
我人まふ人と云ハ父母と八或ハ父或
母妻子なとをまふる之恩愛をすれれ弃恩
をまろうハ恩を報ずるなれんと我まうるとして
まふまふ人とや

会者有別離 源季廣

逢ふもしらぬまことに白雲のかゝる此世のいとはしき
歌乃文は経乃まゝすすめてあひ見えたりね
逢ものハ別るゝ事のならひなりと説り

聞名欲往生 寂然法師

なしきゝて君かりゝろいきの松まつらん秋はかりく

此歌浄土三部経乃文よりや君かりハ君かりと
あまりよんゝ念仏乃功徳乃浄国を得て
あみ仏も功徳を得給ふなるへし

心懐恋慕渇仰於仏

おのれし元両説乃意にしたかひて是を思ふに山おもし月
妙覚果満乃文也常住不滅乃如来衆生をみちびかん
為にしはらく入滅をしめし給へハ衆生も
仏をしたひたてまつるゆへに發心して如来
をたのむるゆへ此心我誰ぞや

十戒のうちに**不殺生戒**

えりつきのかうさゝしまてむいさりせてあまつひめにかたよ
きえしたるまそ元でなるへし

不偸盗戒

うきよの元一つなりとも此年くれぬ人ひとみ沖津白浪

白波とハ盗人をいひならハせり 唐に緑林白波と
て二人ありし山河をかけて白地なりし人ハ其名
をとれりとぞ

不邪婬戒

行ぬなどさのみきゝつゝ人はさよ衣の書なる以書字をね
事ハよく女したり男女のはなしめぬ戒成るへし

不飲酒戒

花のもと露のなさけハほどもあらじ 酔ひなすゝめそ春の山風
露のなさけとハ酒と云字をたらへて讀り 酔なる
まゝかれとハ花まも酔とふ事なきハよろへかる
滅へし 入道前関白家にて十如是事よみせけ
るに如是報

二条院讃岐

うきも猶昔のゆへと思はすハいかにこの世をうらみはてまし

法花経方便品に十如是と云事あり 如是
報とハ何事もむかしのあふと云へ事ハちかふまた
所なし

待賢門院中納言 人々にすゝめて大般若の文字よ
ませけるに 廣度諸衆生其数無有量の心を

俊成

あまねき数もしらるゝ世に植ゑたてゝなかなかなれ
頼むへき人のとるもへきたのひのあり
とそ云事

美福門院に極楽六時讃の絵にかゝるへき歌
たてまつるへきよし侍りけるに 大夫法成
聞て法を歡喜讃仰せん
いまそこれ入日をみても思ひこし弥陀の御国の夕暮の空

音ハきゝしたろかまえ
暁到て浪乃声金乃岸によするほとゝ
いふ心を詠侍りける　浪の暁に
音ハんハ絶きこえしたり
五百弟子品の心を
僧都源信
玉かけし衣のうらをかへしてそおろかなりける心をハしる
衣裏宝珠乃心をかなへ詠かれたる歌也
維摩経十喩中に此身如夢といへる心を
赤染衛門
夢や夢うつゝや夢とわかぬかないかなる世にかさめんとすらん
夢とても現とも知らしされハ夢うつゝと
分別なし此世相ハ何の時より覚くさむと
なりけり

二月十五日暮かたに伊勢大輔かもとにつかはしけ
る
相模
常よりも今日乃煙の便りにや西をはるかに思ひやるらん
今日の煙とハ仏の入滅し給ひて梅檀の薪
をそ焼奉りしかハ今日も煙の便りと
仏の入滅乃日なれハとゝいふことに西方に心をやる
乃素懐をとけん事そと思ふ心残なるとふ心なる
返し　伊勢大輔
今日ハいとゝ涙にくれぬ西の山思ひ入日の影をなかめて
今日ハいとゝとハ仏涅槃乃日なれハなりとなり
入日の影とハ西方の観念のためとそ
○伊勢大輔か方になりける後結縁経供養し
かゝる事法性寺極楽世界乃心をよめる

贈西上人

苦みし月はひかりをたのみてこそ心やすく西へ行らん

此ハ法華経薬王品乃文也若有女人聞此経

即往安楽世界とあり苦しき月の光とハ

此経を聞し事をよめる

観念をよみ給へる

西行法師

やみはれて心のそらにすむ月は西の山へちかくなるらん

やみはれてハ煩悩乃やみはれてなり東ハ発心

門南ハ修行門西ハ菩提門北ハ涅槃門や

菩提ハ悟也されハ西乃山近やちかくなるら

んとハよめるなるべし

此集略抄前後二冊書写之今一冊者宋

野州常縁所写之去年写之抗此作又

別抄也柳幽斎以彼常縁抄

漏脱之哥引合此抄部分哥次第

往本集加用捨被為二冊本雖為之本

写之志彼一冊已以所持之写被返加之分

本抄為別帖以二冊之略抄但前後者之

義者詩閑暇時考引合之為一抄尋 猶幽斎出之異本返るべき加之

于時慶長二丁酉仲冬初三日

也足子素然

九州大學圖書印

九十六